

樽床遺跡群の追加資料報告 (2)

三枝健二

樽床遺跡群研究会

Additional Report of Tarutoko Sites (2)

Kenji SAEGUSA

はじめに

樽床遺跡群は、山県郡北広島町西部の八幡高原に分布する後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡群で、1986年の報告(梅本ほか1986,以下「86報告」と略)以降に2007年(三枝2007b,以下「07追加報告」と略)、2016年(三枝2016b,以下「16追加報告」と略)、2020年(三枝2020,以下「20追加報告」と略)にそれぞれ追加の資料報告を行った。今回報告する資料は、86報告で未掲載であった故児玉集氏採集資料と、上手新一氏により新たに発見された地点の採集資料である。

樽床遺跡群の追加報告にあたって

今回の追加資料報告にあたって、黒曜石と安山岩の岩質分類については86報告に従った。また、流紋岩については考古地質学研究所の柴田喜太郎氏の御指導を得た。同一資料の中で異なった様相を示すものも存在する事から外見上の色調と質感によってⅠ類：やや淡乳褐色味を帯びるもの、Ⅱ類：薄い淡緑色や薄い淡青色味を帯びたもの、Ⅲ類：茶褐色味が強いもの、などの3大別にとどめた。報告総数90点のうち児玉氏採集資料が23点、上手氏採集資料が67点である(表1)。

尚、2020年7月現在で確認されている当遺跡群の地点数は、八幡盆地側10地点、聖湖側9地点20ヶ所あり両地区の合計は19地点30ヶ所となる。その内訳は、86報告までに児玉氏が確認していた八幡盆地側8地点、聖湖側8地点17ヶ所、今村氏が八幡湿原調査で確認した八幡盆地側の池ガ原など2ヶ所(今村1969)、聖湖側では86報告で報告したN3地点とG地点との中間の谷奥地点1ヶ所、20追加報告で報告したC4地点、今回報告するM0地点である。

1. 児玉集氏採集資料

当遺跡群は在野の植物研究者であった児玉集氏により発見されたもので、八幡原地区から聖湖畔一帯(図1)にかけ綿密な踏査を行い複数地点から多量の石器・土器片類を採集した。それらは黒曜石製のナイフ形石器や搔器・細石刃などを中心とした後期旧石器時代資料と石鏃や滑石混入土器などの縄文時代の資料群で、1986年に樽床遺跡群研究会が報告した。また、20追加報告ではそれらの報告の纏めとして西中国山地における当遺跡群の在り方や瀬戸内系石器類について言及した。

今回はこれに次ぐ資料報告で、86報告で未掲載であった児玉氏採集資料の一部で親族の高木茂氏が保管・所蔵する土器小片類を含めた90点余りのうち図示可能な23点を報告する。図2-1~8と10~16及び図3-17~24がそれで、図2-9は上手氏採集資料である。また、これらのうち採集地点が確認されたものは9がM1地点、12・17がN1地点、20・24がN地点で、それ以外は地点不明である。尚、18については資料にG2と記入され

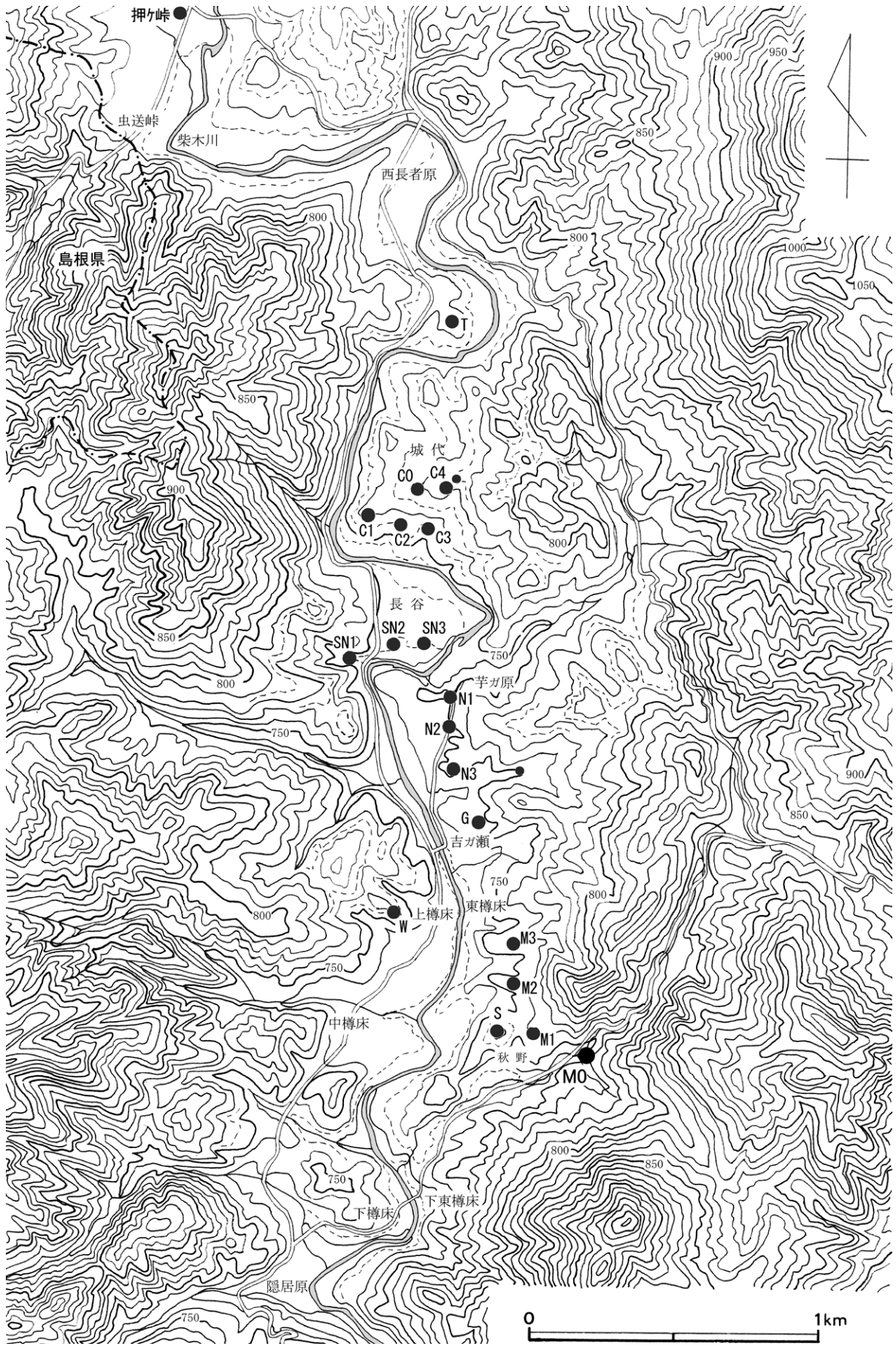


図1 聖湖周辺遺跡分布図 三枝 (2020) 第8図に加筆

ているが、児玉氏からの G 地点での枝番号地点についての伝聞や同氏作製の分布地図にも枝番号地点の記載が無いことから誤記入として地点不明扱いとした。

1 は水晶製で両側辺に加工を施す平刃のナイフ形石器である。背面と側辺の一方に節理面を留め、主要剥離面は段差のある節理面風の剥離面である。両側辺と刃部腹面側に主に平坦剥離の加工を施している。

2 は安山岩製の縦長剥片を素材とした基部加工ナイフ形石器である。主要剥離面及びバルブは平坦で、背面には主要剥離面と同一・斜行・反対方向などの剥離痕を留めている。基部両端の表裏と先端部の一辺に加工を施しており、背面の先端付近で剥離痕稜線が分岐する部分に潰れ痕が観察される。

3・4 は黒曜石製の搔器で双方とも上部を欠損している。3 は背面中央から右側辺にかけて自然礫面を留める厚手の縦長剥片を素材とし、その先端部に加工を施している。4 は薄手の縦長剥片を素材とし、剥片先端部から両側辺にかけ半円状に細かな加工を施している。

5・6 は共に細かな気泡の多い黒曜石製の錐形石器である。双方とも素材剥片の打面部を残置しており、剥片下端部の両辺に加工を施している。

7・8 は共に安山岩製の抉入削器である。7 は背面剥離縁に平坦な石核底面と、主要剥離面と同一方向の剥離痕を留める横長剥片を素材とし、打点部で半折している。打面縁と剥離縁に抉状の加工が施されている。8 は下半部を折損する縦長剥片を素材とし、側辺の主要剥離面側に抉状の加工が施されている。

9 は上手氏採集の黒曜石製の縦長状の剥片で、背面には主要剥離面と同一方向の剥離痕などが残されている。主要剥離面の下端と打面側に剥離を施した後に一側辺を縦に折断しており、対向する辺に使用痕の剥離痕が、縦の切断面上部に微細な剥離痕が観察される。

10 は安山岩製の削器である。背面に主要剥離面と同一若しくはやや斜行気味の剥離痕を留めており、打点部で半折している。主要剥離面の下辺中央付近から半折部にかけて平坦剥離の加工が施されている。尚、当資料については背面側の剥離痕稜線部と縁辺上半部周辺、主要剥離面の同じく上半部付近に使用によると思われる軽い磨耗面（薄いアミ目部分）が広がっている。特に表裏双方に剥離縁に沿って帯状の研磨状の磨耗面（濃いアミ目部分）が観察される。

11・12 は安山岩製の凹基の石鏃で、12 は風化気味である。

13 は安山岩製の楔形石器で、表裏共に平坦な剥離痕に覆われているため素材剥片については不詳である。上・下辺の表裏に潰れ痕が集中し、一辺に截断面を有している。

14 は安山岩製の楔形石器削片である。

15～22 は剥片で、19 が黒曜石製でそれ以外は安山岩製である。このうち 15～17 は幅広・横長の剥片で、15 は背面に同一及び斜行気味の方向の剥離痕を、16 は背面に主要剥離面と同一方向の剥離痕を留めており著しく風化している。

18～22 は縦長状・縦長の剥片で、自然面打面の 21 以外は平坦な剥離痕を打面としている。背面構成は、主要剥離面と同一方向の剥離痕を留める 19・22、同一と横方向の 21、同一と反対方向の 20、反対方向のみの 18 などである。また、18・20・22 の背面と 21 の打面には自然円礫面を留めている。

23・24 は安山岩製の石核で、23 は剥片素材、24 は円礫素材である。

23 は自然面打面の薄手の縦長状剥片を素材とし、その一辺で交互剥離状に横長剥片の剥離を行っている。背面には主要剥離面と同一と斜行気味で反対方向の剥離痕を留めており風化が進んでいる。

24 は小ぶりの円礫を素材とした両設打面の石核で、上下に設けた打面から寸詰まりの縦長剥片の剥離を行っている。

2. 上手新一氏採集資料

当資料は、西中国山地自然史研究会の上手新一氏により採集されたもので、前述した M1 地点の黒曜石資料（図 2-9）以外は全て新発見地点の資料群である。

この地点は聖湖東南部にあたり、児玉氏により確認された東岸の最南端である M1 地点の東南で、M1 地点付近から S 地点方面にかけて延びる尾根の南側の付根に当たる谷筋に面した狭小な平坦部に位置（図 1）しており、今

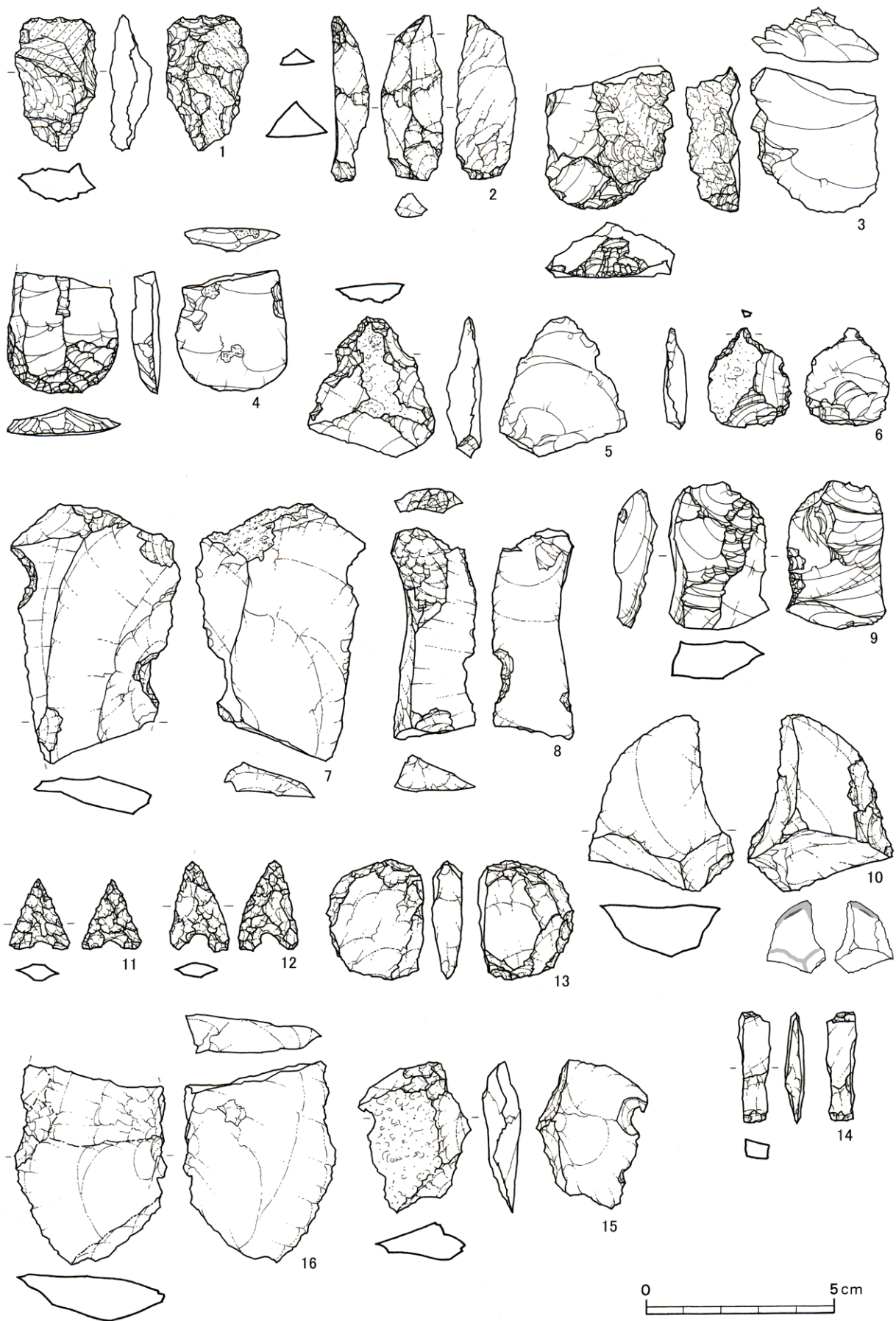


図2 遺物実測図1 (2:3) (9はM1地点, 12はN1地点, 1~8・10~16は地点不明, 10のアミ目は磨耗痕を示す)

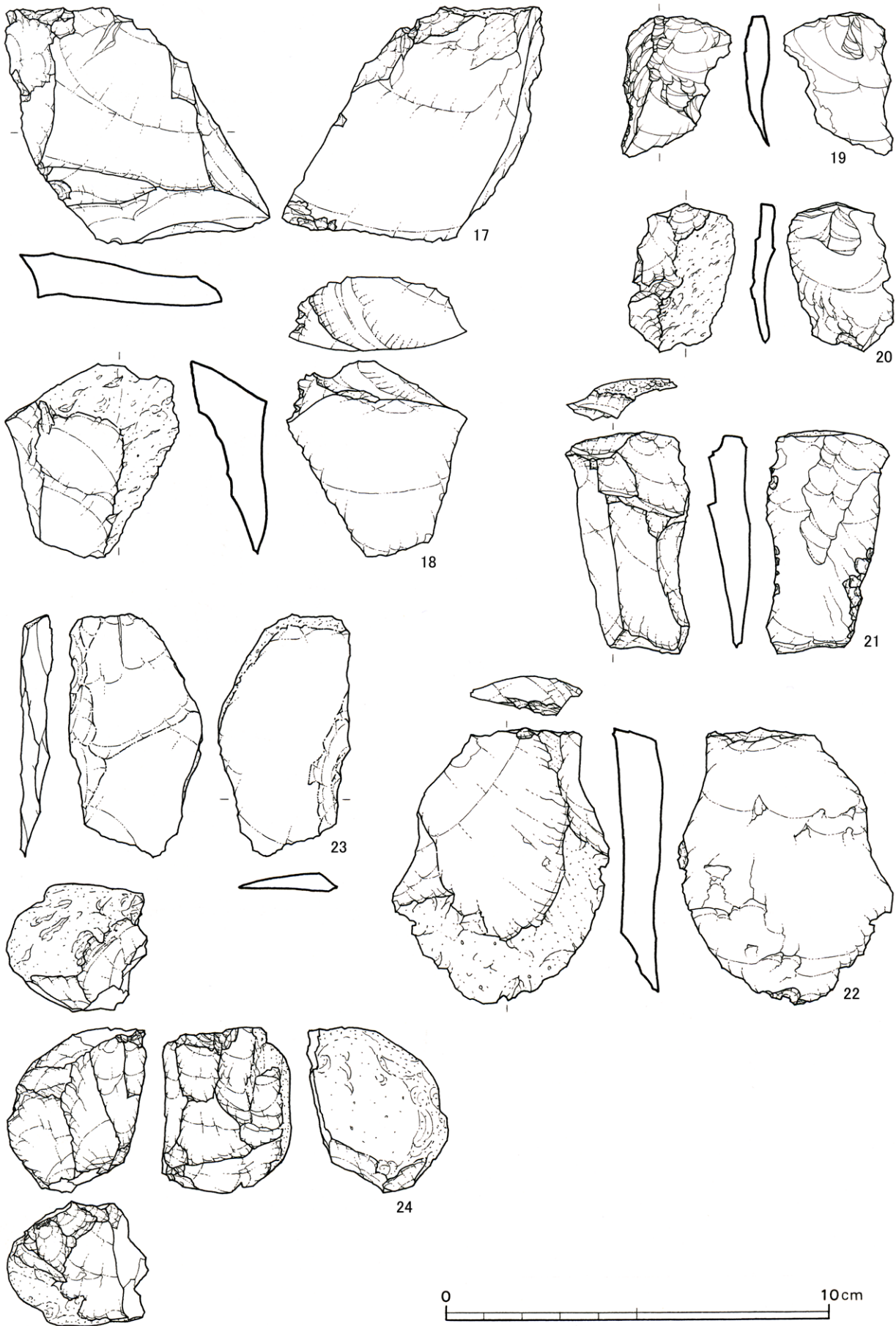


図3 遺物実測図2 (2:3) (17はN1地点, 20・24はN地点, 18・19・21～23は地点不明)

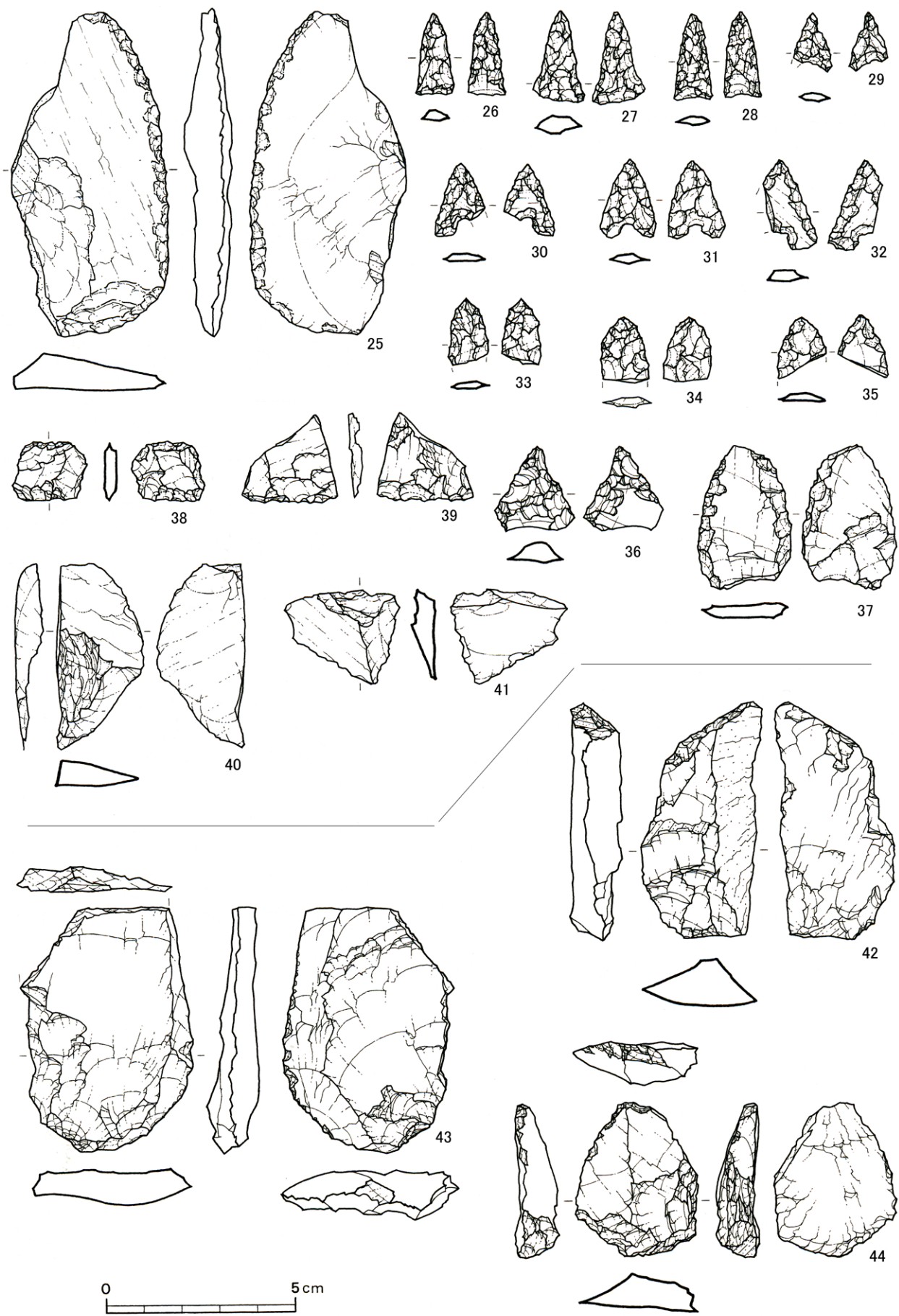


图4 遺物実測図3 (2:3) (M0地点 - 1)

後この地点を M0 地点と呼称する。

この地点からは若干の黒曜石製を含む安山岩製の石鏃などの石器類及び爪形文土器細片 1 点（未報告）と、流紋岩製の製品・剥片・石核類などの石器類が採集されている。

山手氏によれば、前者の安山岩製石器類などの資料は満水時の波打際にあたる黒色土層～漸移層部分を主な分布域として採集されており縄文時代の所産と考えられる。これに対して流紋岩製の石器類については満水時の波打際より下位にあたる分布域を示しており、本来の包含層準も漸移層部分より下位の黄褐色粘質土層の可能性が高く、同土層が露出する平坦部の比較的限られた分布範囲で採取されている。また、周辺は山林に覆われているため当石材の産出地や採取状況などについては確認出来ていない。

縄文時代の資料

縄文時代の資料（図 4 - 25 ~ 41）については、製品 15 点、剥片 2 点の石器類 17 点を報告した。黒曜石製 1 点以外は全て安山岩製で、そのうちⅡ類やⅢ類などの粗質の安山岩類が 2 / 3 を占めている。

25 は安山岩製の削器である。平坦な自然面打面で主要剥離面及びバルブは平坦である。背面には広く素材剥片の分割面とみられる平坦面と、同一打面の先の剥離痕があり、剥片下辺の表裏に平坦剥離による刃部加工を施している。背面側の図下辺にある（主要剥離面の剥離方向に直行する方向の）剥離痕については、刃部加工に関連したものと考えられる。

26 ~ 34 は石鏃、35 ~ 37 は石鏃未製品で、黒曜石製の 36 以外は安山岩製である。26・27 は細身の平基のもので、凹基として分類した 28 も含めて加工状況などが類似し、岩質も安山岩Ⅰ・Ⅱ類である。29 ~ 32 は凹基の石鏃で、中央部に素材剥片の平坦な剥離面を留めるものが目立つ。33・34 については基部側を欠損している。先端部が余り先鋭化しないタイプのもので、86 報告でも例数は非常に少なく加工状況もやや粗目であるなど、未製品段階の可能性もある。

石鏃未製品のうち、黒曜石製の 36 は基部側に素材剥片の主要剥離面を広く留めている。また 37 は平坦な主要剥離面を横位に用い、背面にはそれに直交する平坦な剥離痕を広く留めている。

38 は安山岩Ⅰ類製の楔形石器である。39 は平坦剥離の薄い剥片を素材とした削器で、両辺を折損している。

剥片のうち、40 は縦長状のもので打点部を欠失している。背面の側辺に平坦な剥離痕があり、それを打面とした剥離痕の密集部と平坦な剥離面などが観察される。41 は打面幅が最大幅となる幅広の剥片で、剥離痕の稜部近くを加撃しており、背面には平坦な剥離面のほか主要剥離面と同一及び斜位を示す剥離痕を留めている。

流紋岩製の石器資料

流紋岩製の石器資料（図 4 - 42 ~ 図 12 - 90, 図版 1 ~ 3）は、加工痕や使用痕のある剥片を含めて製品 28 点、剥片 16 点、石核 5 点の 49 点を報告した。柴田氏によれば周辺に広く分布する高田流紋岩類に含まれる硅質凝灰岩に分類されるものであるとの事であるが、ここでは所謂「流紋岩」として総称した。岩質分類では報告資料中Ⅰ類が 53・68 の 2 点、Ⅲ類が 48・62・64・83 の 4 点で、それ以外はⅡ類により占められており、この傾向は未報告資料も同様である。摂理面や不規則な剥離の頻度が高く質感は粗い。Ⅰ類は風化した摂理面に近い部分にあたり全体に淡乳褐色系の色調で風化気味の感を受けるもので、Ⅲ類は茶褐色味が強いグループである。ただ 68 のように一資料中にⅠ・Ⅱ類の要素が混在するものやⅡ類とⅢ類の中間的な色調のものもあるため、母岩分類には限界があり岩質分類は大まかな区分にとどめた。尚、この流紋岩製の資料については 2020 年 6 月 15 日現在で残核片 3、剥片 73、碎片 160 の計 236 点の未報告資料がある。

石器類の内訳は、製品類が部分加工のナイフ形石器（4 点）、錐形石器（8 点）、尖頭状の削器（2 点）、彫刻刀形石器（2 点）、削器（3 点）、加工痕のある剥片（3 点）、使用痕状の剥離痕のある剥片（6 点）などと、剥片（16 点）、石核（5 点）である。

ナイフ形石器（42 ~ 45）

ナイフ形石器は基部を中心とした部分加工のものである。

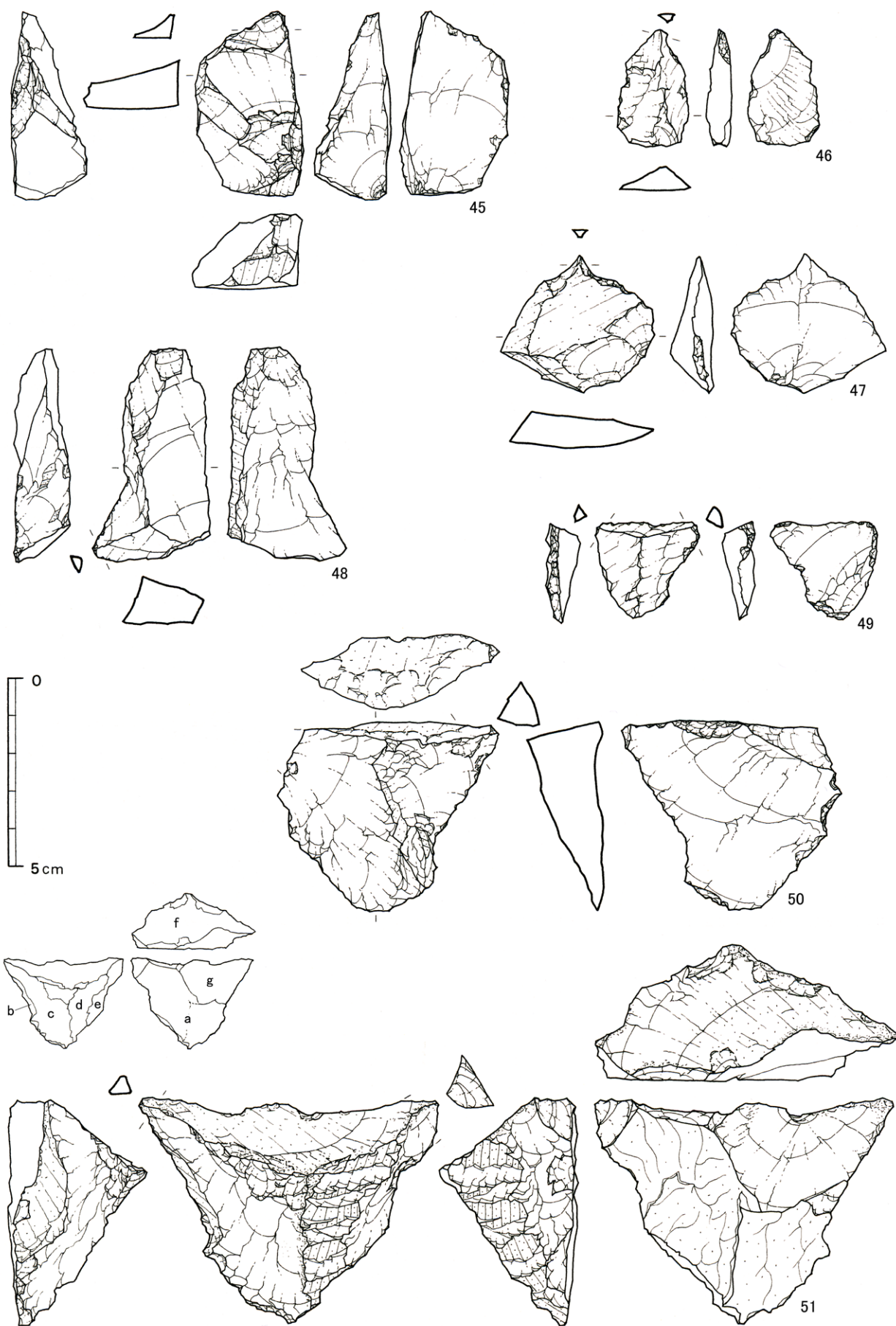


图5 遺物実測図4 (2:3) (M0地点-2)

42 は基部加工のナイフ形石器である。平坦な剥離面打面を持つ縦長状の剥片を素材とし、背面には平坦な節理面状の面と主要剥離面の剥離方向と同一方向の剥離痕を留めている。背面側には打面縁付近から平坦な剥離の加工を施しており、その先端は背面稜部中央付近にまで及んでいる。断面形態はやや厚味のある三角形を呈しており、先端部の一辺に節理面と稜上からの小規模な剥離痕が観察されるが、加工痕か石核段階で生じた剥離痕かは判断し兼ねる。この辺の主要剥離面縁とその背面側には主要剥離面とは反対方向の複数の剥離痕が観察されるが、これらは剥片剥離時に形成されたものの可能性がある。打点部分の打面の遺存度が低いため正確な剥片剥離角度は不明だが 100 度前後と推定される。

43 は幅広い縦長状の剥片を素材としており、背面には主要剥離面とほぼ同一方向の剥離痕などを留めている。打面は平坦な剥離面打面とみられるが、打面の一端に偏じた打点部は打点破碎により失われ線状となっている。主要剥離面側には、剥片の打点とは反対側の打面端付近からの加撃による剥離痕が広がっており、その加撃部周辺には複数の剥離痕が集中している。また、主要剥離面の打点部周辺から側辺にかけての縁辺に小規模な剥離が施されており、この辺のほぼ全体に微細な剥離痕が観察される。剥片下端にあたる上半部は 2 方向から折損している。主要剥離面側への加工が変則的な広がりを示しているものの、基部加工のナイフ形石器として分類した。

44 は不定形な剥片を素材としており、主要剥離面下辺に緩い段が生じその中央部付近にバルブ様の乱れが観察される。背面には主要剥離面と同一及び斜め横方向の剥離痕を留めている。素材剥片の打面側を上端とし、打面寄りの一辺（背面側右側辺）を背面側から折断し先端部周辺にかけて鈍角的な角度の加工を施しているため、素材剥片の打点部周辺は失われている。また、剥片下辺部両側の加工は階段状剥離となっており、それに挟まれた下端中央部には節理面状の剥離面を留めている。背面右側の階段状剥離の加工痕も背面側からの折断面に後続する剥離である。これらの事から、やや寸詰まりの感はあるものの基部加工のナイフ形石器として分類した。

45 は厚手で不定形な剥片を素材としており、背面には主要剥離面と同一及び反対方向の剥離痕を留めている。平坦な節理面を打面としており、背面右側辺には剥片下端にかけて平坦な剥離面が延び、断面形態が直角三角形を呈している。この平坦な剥離面はその打点部が当剥片主要剥離面の打点部にもあたる事から、打点部から直角の角度を保って派生した主要剥離面の一部と考えられ、下端部にバルブが確認される。剥片の背面側頂部にあたる部分には、この側辺の平坦な剥離面から細かな剥離が施されており、頂部付近の除去を目的とした加工とみられる。剥片最大幅部分の縁辺部には鈍角的な角度の加工が施され、その端部は背面中央部付近にまで及んでいる。この加工部分から先端部にかけてと右側辺の先端部にかけて、微細な剥離痕が確認される。やや肉厚ではあるものの、背部の加工や刃部の状況などから、切出型を呈する部分加工のナイフ形石器として捉えた。素材剥片の剥片剥離角度は 88 度である。

尚、主要剥離面下端の一部にはバルブが観察され、背面上端の刃部縁にも主要剥離面と反対方向の小剥離痕がみられる。これらの面についても当剥片剥離時に形成された可能性がある。

錐形石器 (46 ~ 53)

錐形石器は小型資料と大型資料が存在し、1 類：素材剥片の一端に細かな加工を施し突出部を作り出すもの (46 ~ 48)、2 類：平面形が逆三角形を呈しその一端若しくは両端付近に加工を施し突出部を作り出すもの (49 ~ 51)、3 類：断面形態が三角若しくは四角形に成形された剥片の一端にかけて稜線付近に加工を施し突出部を作り出すもの (52・53) に分類した。

1 類のうち 46 は素材剥片の打面側に加工を施しているのに対して、47・48 では剥片下端部に突出部を作り出して打面部は残置している。特に 48 の加工は微細で、突出部周辺の縁辺には微細な剥離痕が観察される。

尚、48 の主要剥離面左側にある節理面などの面は、主要剥離面と同時に形成された可能性が高い。3 資料とも突出部付近で若干の磨耗痕が観察される。

2 類は大小を問わず背面側中央部付近で 3 面の剥離痕稜集合部が剥片最厚部となる形態である。49 は平面形態が逆三角形に近い不定形な素材剥片を横位に用い、背面上面の剥離痕両端部付近に加工を施し突出部を作り出している。背面左辺には鈍角的な剥離を施し、上辺を中心に微細な剥離痕が観察される。

50 は平面形態が逆三角形を呈する不定形な剥片を素材としている。素材剥片の打面である自然面の一端周辺の

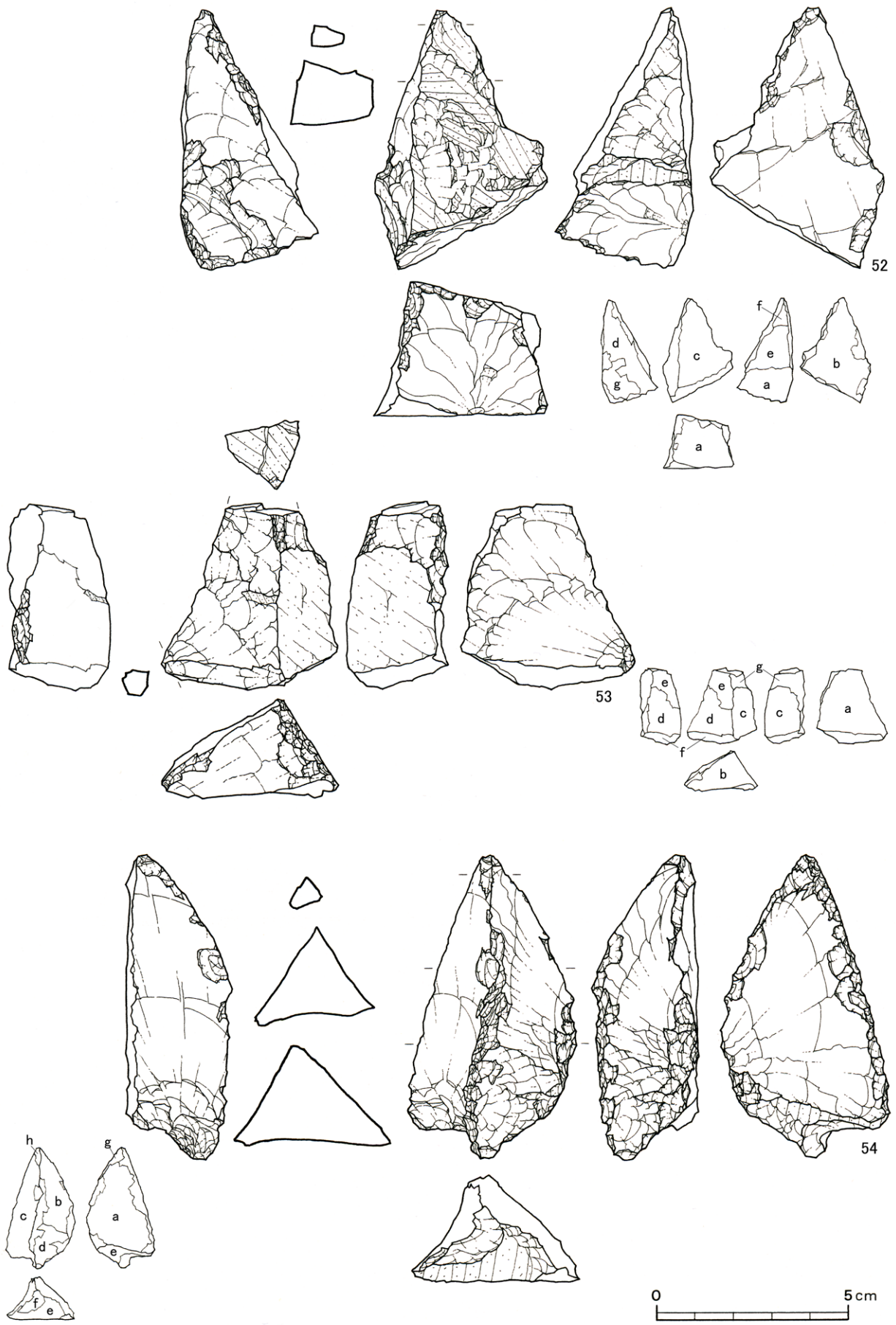


图6 遺物実測図5 (2:3) (M0地点 - 3)

表裏に加工を施し突出部を作り出しており、周辺の縁辺部に微細な剥離痕が観察される。当資料についてはもう一方の突出部が欠損しているため、両端に錐としての加工があったか否かは不明である。尚、錐突出部上辺にあたる打面には加工痕と微細な剥離痕が、同じく下辺（背面右辺）縁には微細な剥離痕が、また剥片下端付近の一部には腹面側から鈍角的な加工が施されている。素材剥片の剥片剥離角度は75度前後とみられる。

51も平面形態が逆三角形を呈する大型肉厚な剥片を素材としたもので、背面には石核段階の剥離痕（b～e面）を留め打面は平坦な剥離痕（f面）で、主要剥離面であるa面は平坦な節理面となっている。この節理面の一端にf面から剥離（g面）を加え突出部をより尖鋭化し、先端部にかけて加工を施しており、その部分にかけて磨耗が観察される。また上面の剥離痕の縁辺部3ヶ所に敲打痕が集中したような荒れが認められる。もう一方の背面右端の突出部は欠損しているが、その欠損部付近に加工痕や微細な剥離痕及び擦れ痕が見られる事から、49と同じく双方の突出部を錐としたものと考えた。尚、剥離痕稜部の擦れ痕は両突起部以外でも、背面中央最厚所から縦に下るc・d面境の稜線部分及びその周辺でも確認される。

3類は大型の資料で、共に基部の側辺にも加工を施し削器若しくは搔器様の用途にも用いたと考えられる。52はa面が素材剥片の主要剥離面にあたる平坦な剥離面で、打点に向かってフィッシャーが収束する。b面は一段階前の素材剥片の主要剥離面、c面はその背面にあたる。そのため、b面とc面から成る厚手の素材剥片をb面を打面として剥離し（a面）、その後d・e面により側辺を除去して断面四角形で先端部が先鋭化する形態を作り出し、f・g面の加工や先端部・基部周辺・a面下半縁辺部などに調整加工を施している。またb面左辺の先端部にかけて小規模な剥離痕が、a面の打面側の辺には微細な剥離痕が観察される。a面の剥片剥離角度は95度である。

53はa面が素材剥片の主要剥離面にあたりバルブは平坦で、b面は石核段階の平坦な剥離痕である。背面には節理面のc面と、a面とほぼ同一打点のd面及び剥離方向が斜行するe面があり、断面形態が三角形を呈し先端部は節理面で折損している。c面の先端部側にa面から加工を施し（g面）、その下端部にあたるe面との境の背面稜部にも細かな調整剥離を加えている。また、52と同様に基部b面の一辺に加工が施されており、同様な用途が考えられる。また、f面はd面の打点周辺部分のほかにc面との接点部分にもバルブを持っている。当資料については、a・d・f面の打点部にあたる部分が角柱状に突出しており、その突出部周辺に若干の磨耗様の状況が認められているが錐状の機能を果たしたかは判断出来ない。

尖頭状の削器（54・55）

尖頭状の削器としたものは、断面三角形の厚手の剥片先端稜線部などに加工を施す比較的大型の資料で、ここでは便宜的に尖頭状の削器と仮称した。

54はa面が素材剥片の主要剥離面で、b面は一段階前の素材剥片の主要剥離面にあたる石核段階のもので、e面の節理面も石核段階からのものと考えられる。c面については、a面との切り合い関係が加工部により失われているが、当剥片剥離後にf面を打面として剥離された可能性が高い。

加工は先端にかけての稜線部と、下半部の稜線部に分かれる。前者はa面の主に右辺全体に施された比較的小さな加工痕のうち、先端部にかけての部分では剥離痕稜線の鈍化が顕著である。下半部の加工はb面下半の二辺とa面右側辺の上半から続く加工である。特にb面下半では、d面のように対向する辺にまで剥離が及んでいる。この下半部の加工部分においても各辺で剥離痕稜線の鈍化が観察され、a面では右側辺、b面ではd面稜部も含む下半部全体に及んでいる。また先端部には先端側からの複数の剥離痕（g・h面）があり、g面は槌状を呈しh面はごく浅い剥離痕である。

これらの事から、当資料については①先端部のみならず加工を施した各辺を刺突具や削器として使用、若しくは②先端部にかけての剥離痕稜線の鈍化を使用痕、下半部の加工部にみられる剥離痕稜線の鈍化を着柄に伴う擦痕とした先端着装具、の2通りが想定される。先端部にみられる槌状の剥離痕や下半部での稜部鈍化の位置が各辺でほぼ共通する事などから、②の可能性が高いと考えられる。

55はより大型の資料で、a面が素材剥片の主要剥離面で、素材剥片の背面はb・c面、加工はd～n面で、o面は節理面での折損である。a面は平坦な節理面で、剥離痕のb面と節理面のc面が石核段階のものともみられる。d面の打点は背面稜部にあるが、その鉛直方向の下辺にもバルブがあり、そのバルブはe面のフィッシャー収束部に

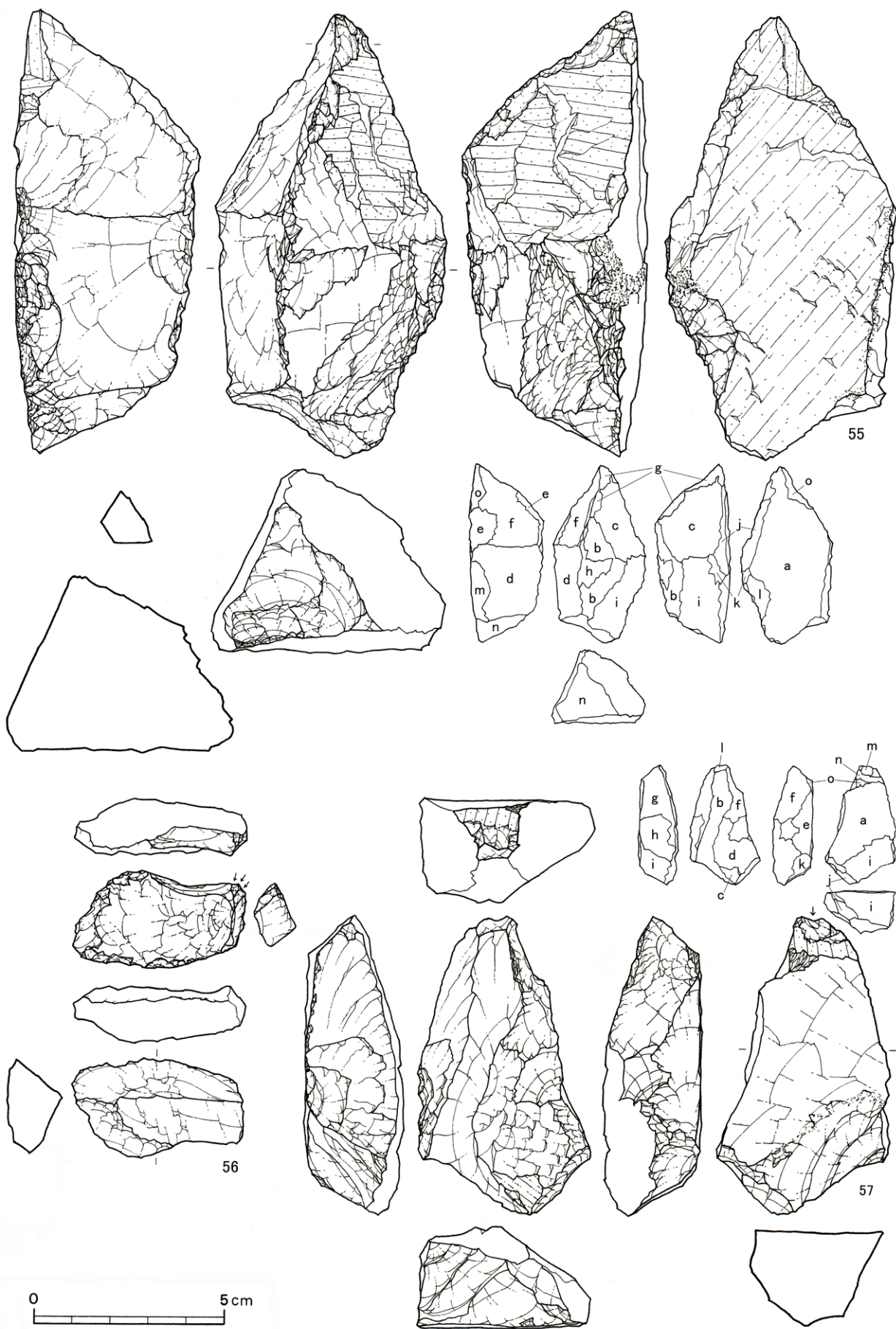


图7 遺物実測図6 (2:3) (M0地点 - 4)

もあっている。e面は途中でf面を挟んで2ヶ所に分かれているが、f面はe面のフィッシャーの乱れ部分から薄く派生しているように見受けられる。d面とe面の切合いはやや不鮮明であるが、d面とf面では上下のバルブの間に直線的で明瞭な稜部を持ち、f面が後続する切合い関係を示す。これらの事からe・f面の剥離痕については、d面の剥離時に下辺のバルブからe面が同時に形成され、その過程でf面が剥落した可能性がある。

加工は、背面稜部の先端付近にかけて施されているg面と、同じく中央付近を中心としたh面、主に側面を中心としたi・j・l・m面及び基部のn面に分かれている。a面縁辺にあたるi・m・n面の打点部周辺では潰れ状態を示しており、k面は敲打痕の集中部となっている。特にk面とm面では背面と腹面との境部分でエッジの鈍化が顕著で、背面稜部中央付近を中心とした加工であるh面でも小剥離痕等の集中により同様な鈍化が観察される。これら下半部における稜部の意図的な鈍化などから、当資料については先端部を機能部とする手持ちの尖頭具と考えた。

尚、当資料についてはa面縁辺にあたるm面の打面部分周辺の打点部分が白化して遺存している。またc・e・f面が他の面と比べ色調等でやや新鮮な遺存状況を示している。

彫刻刀形石器 (56・57)

彫刻刀形石器には小型資料と大型資料がある。

56は小型の資料で、平坦な剥離痕を打面とする幅広・横長状の剥片を素材としている。背面には主要剥離面と同一打面の剥離痕があり、その剥離痕の一端で剥片の側辺との境付近に打面側から3打ほどの細かな槌状剥離様の加工を施している。また、背面側の縁辺部には小規模な剥離痕が連続し全体に微細な剥離痕も観察される。素材剥片の剥片剥離角度は104度である。

57は平坦打面で平坦な剥離面を底面とする石核(石核2類)の両側を除去し、その先端部に刃部を設けるものである。a面が素材剥片の平坦な主要剥離面で、背面には一段階前の剥片の主要剥離面であるb面と、その打面にあたるc面があるが、加撃時に打点周辺が剥落しd面が形成されている。e・g面により両側を除去し、更に、f・k面などにより形を整えている。h面はg面加撃時にそのバルブ周辺に生じた薄い剥離痕とみられる。尚、i・j面はg面の剥離に先立つ石核の作業面の剥離痕である。

刃部加工は、b面の先端部に剥離を施したl面から節理面のn面側に不鮮明であるが3打程の打撃痕が認められる。このうち両サイドの剥離は不鮮明であるが中央のm面はやや幅広く浅いものの彫刻刀面様の剥離とみられる。g・h面縁の左辺ほぼ全域に微細な剥離痕が観察され、i面下辺とa面との稜部には55同様に加撃時の打点部の白化が観察される。また、o面は敲打痕の集中部分である。

削器 (58～60)

削器には大型資料2点と小型資料1点がある。

58は厚手の不定形な剥片の一辺に刃部を設けたもので、もう一方の辺の縁辺には微細な剥離痕が観察される。当剥片の主要剥離面であるa面は、打面とみられる上辺のh面から加撃されたb面により大半を失い2ヶ所に僅かに遺存しているのみである。背面には、節理面などのc・d面、対向する剥離方向のe・f面、両設打面のg・h面などがある。石質が粗いため不規則な剥離が生じており、d面についてもe面の形成時に生じたものと考えられる。

刃部加工は背面左側辺に施されているが、その刃部縁は変則的な交互剥離様を呈し非常に粗いものである。また、鈍角的な背面右側縁には微細な剥離痕が観察される。

59もやや厚手の不定形な剥片を素材にし、両側辺に加工を施したものである。平坦な剥離痕を打面とした最大幅を打面部付近に持つ不定形な剥片を素材としている。主要剥離面のバルブは平坦で、同一の打面縁右端近くにはもう一ヶ所バルブが観察されると共に、剥片下端部にも明瞭なバルブを留めている。背面には、節理面の他に主要剥離面と同一打面の剥離痕を留めているが、その下端部にも主要剥離面下端のバルブと同じ場所にバルブと小剥離がみられる。

加工は、背面右側辺では変則的な交互剥離様を呈したやや粗目の加工が、左側辺縁ではほぼ直角に近い鈍角的な加工が施されている。また、背面側の直線的な打面縁には微細な剥離痕が観察される。素材剥片の剥片剥離角度は

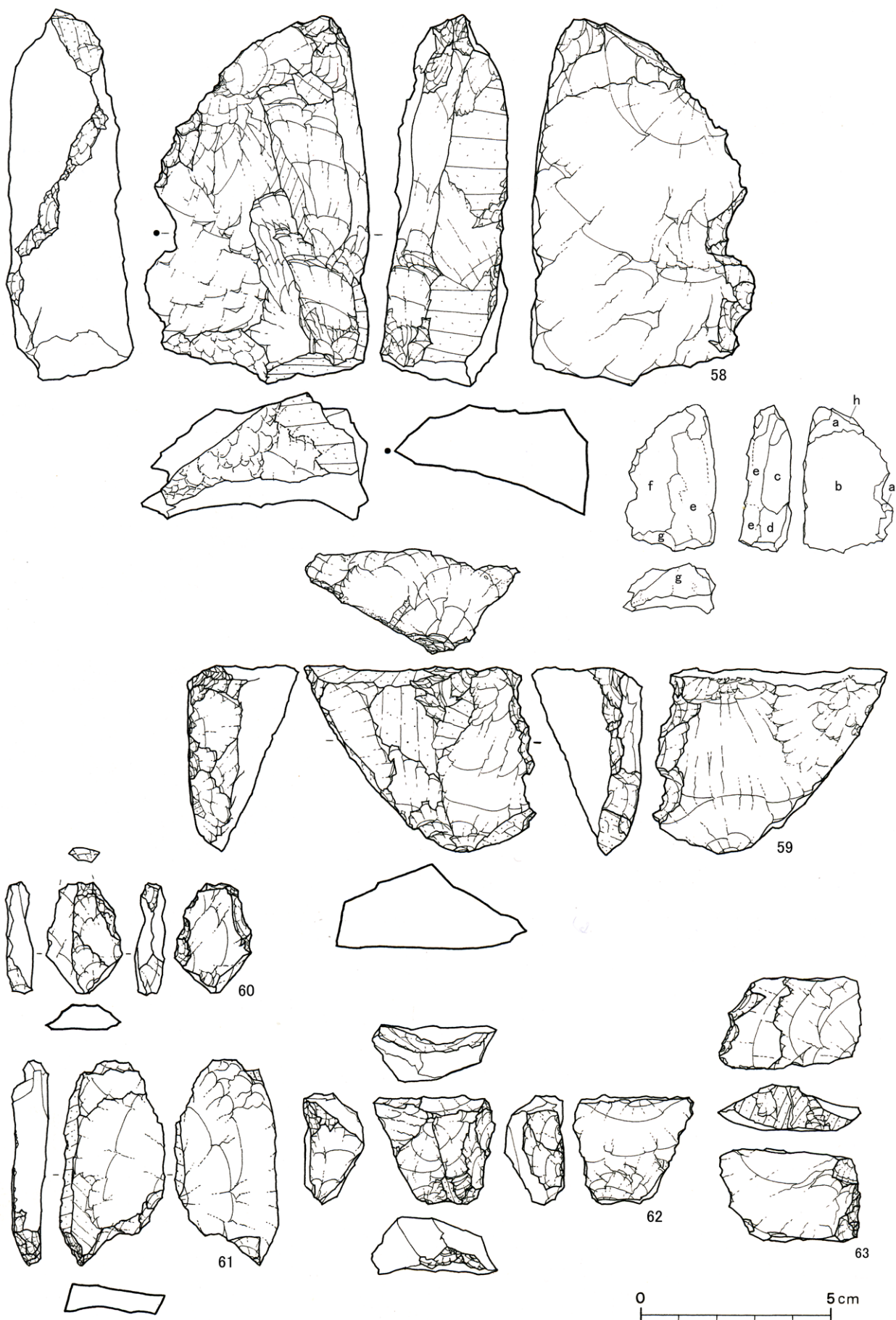


图8 遺物実測図7 (2:3) (M0地点 - 5)

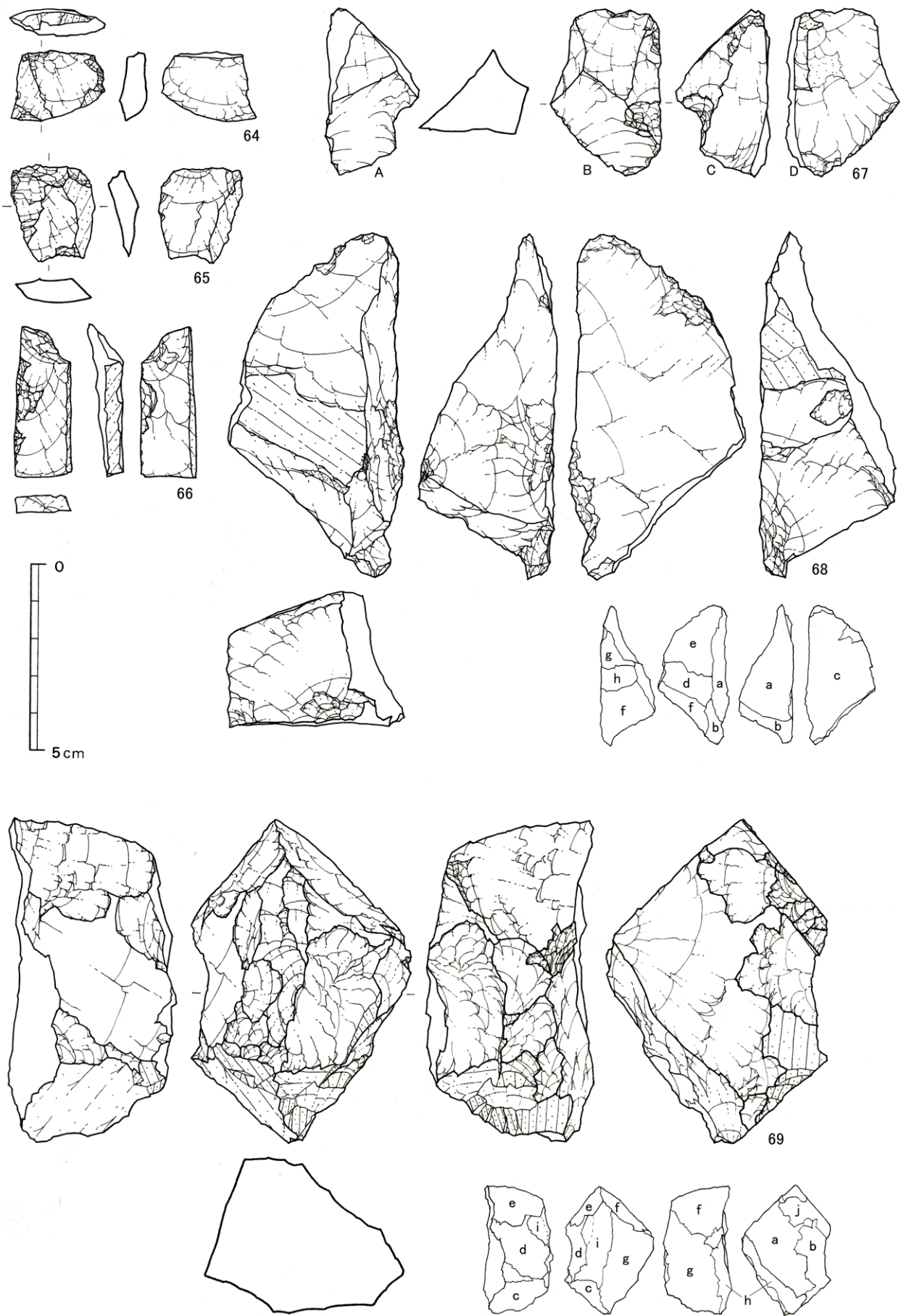


图9 遺物実測図8 (2:3) (M0地点 - 6)

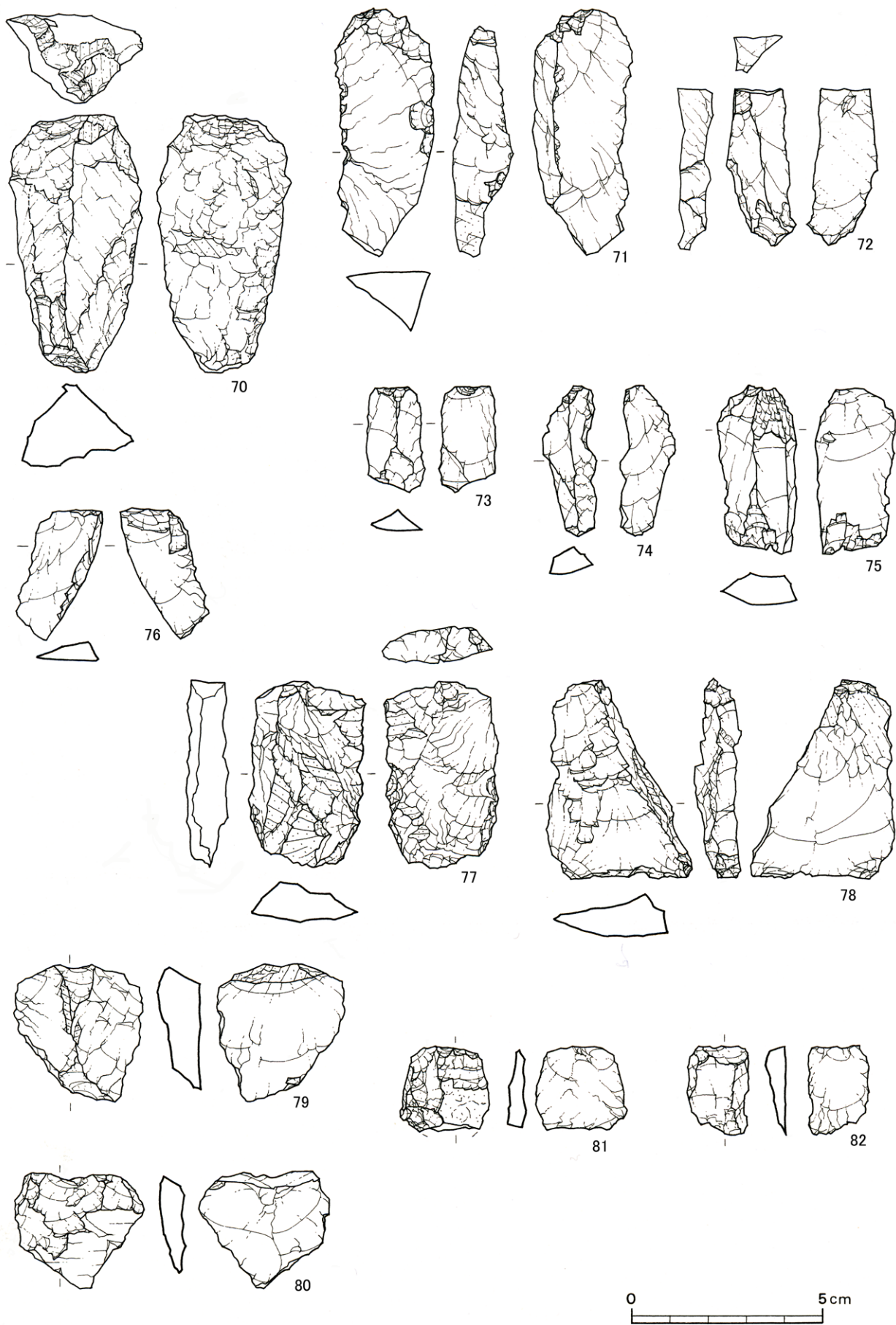


图 10 遺物実測図 9 (2:3) (M0 地点 - 7)

90 度である。

58・59 については、鋸歯縁状に近い変則的で粗い交互剥離様の加工と鈍角的な剥離縁を用いた複合的な使用の想定が共通する。

60 は小型の資料で、平坦な剥離面を打面とし一端にかけて狭まる不定形な横長状の剥片を素材としている。両側辺の主に主要剥離面側に剥離を加えており、先端部を欠損している。基部の打面に隣接する節理面状の平坦面については主要剥離面形成後の剥離とみられる。

加工痕のある剥片 (61 ~ 63)

加工痕のある剥片については、比較的明瞭な加工を施すものの器種分類が不明確なものをまとめた。

61 は節理面を打面とする横長状の剥片で、打点部は打面際に偏じバルブは平坦で不明瞭である。背面には同一打面とみられる複数の剥離痕と、剥片下辺縁に節理面状の平坦な石核底面を留めている。剥片下辺には微細な剥離痕が観察され、その一端の先端部にかけて細かな加工を施している。また、その部分の主要剥離面側に 1 面の剥離痕が観察されるが、偶発的なものなのか錐もしくは彫刻刀面様のものなのか判断しかねる。素材剥片の剥片剥離角度は 118 度程である。

62 は平坦な剥離痕を打面とする不定形な剥片で、背面中央には同一打点から派生する 2 面の剥離痕と、背面左側辺には上端部にもバルブの収束部にみられるような小剥離痕がみられる。主要剥離面の打点直下周辺はネガティブな凹面状を示すが、打面両端から下半部にかけて次第にポジティブな凸面状へと変化しており、下端部にバルブがみられる。背面右側辺に 2 面のやや鈍角的に近い剥離を、剥片下端部に背面側から鈍角的な剥離を施している。

63 は打面と下辺に節理面状の平坦な剥離面を持つ不定形な剥片を素材とする。主要剥離面は平坦で、打点は打面の一端に偏じ、背面には同一打面の剥離痕と、ポジティブとみられる横位の剥離面を留めている。主要剥離面の打点直下部分の辺に細かな加工が施されており、対向する辺には刃こぼれ状の剥離痕が観察される。

使用痕状の剥離痕のある剥片 (64 ~ 69)

使用痕状の剥離痕のある剥片については、明瞭な加工痕と言えない資料を対象とした。

64 は平坦な剥離痕を打面とした不定形な剥片を素材としており、主要剥離面のバルブは平坦で下辺は蝶番剥離状となっている。背面には同一打面の剥離痕と節理面があり、背面右側辺に細かな剥離痕が観察される。剥片剥離角度は 90 度である。

65 は背面と主要剥離面の一部に節理面を留める不定形な剥片を素材している。背面には同一打面と思われる複数の剥離痕を留め、主要剥離面の打点部は加撃時に薄く剥落している。背面の剥片下端に細かな剥離痕が観察される。

66 は両側辺に節理面を持つ剥片で、下辺に平坦な剥離痕を持つため短冊状の形状をなしている。主要剥離面は平坦で、背面の剥離痕も主要剥離面と同じ場所にバルブが形成されている。背面左辺に使用痕と見られる不規則な剥離痕が密集しており、同様な剥離痕は主要剥離面左辺にも散見される。

67 は多面体を成す不定形な剥片で、図 D が主要剥離面にあたり打面は加撃時に破損し線状となっている。主要剥離面には打点部から側辺に沿って槌状剥離様の剥離痕が延び、下端部に主要剥離面と反対方向の小剥離痕が認められる。図 A・B には節理面状の平坦な剥離痕などを留めている。背面にあたる図 B 上半には、主要剥離面と同一打点の剥離痕のほかに、図 B 下半の摂理面を打面として図 C 左辺の剥離が行われている。主要剥離面の下辺を含め、図 B 下半の 2 辺に微細な剥離痕が観察される。

68 はブロック状の剥片で、主要剥離面である a 面と打点を共にする b 面も同時に形成された主要剥離面の一部とみられ、a 面の打点鉛直方向の下辺にバルブと小剥離痕がみられる。f 面は一段階前の素材剥片の主要剥離面、c 面はその前段階の平坦な剥離面である。まず、背面に節理面 (d 面) と剥離痕 (e 面) を持つ剥片の平坦な主要剥離面 (c 面) を加撃して分割し (f 面) ブロック状の剥片を作り、更にその剥片を d 面から分割 (a・b 面) しており、一端にかけて突出する形態の剥片を作り出している。g・h 面は f 面形成前の面である。剥片剥離角度は a 面が約 90 度、f 面が 100 度である。c 面の上下部表裏に若干の剥離痕が認められるが、52・54・55 などの先端部加工

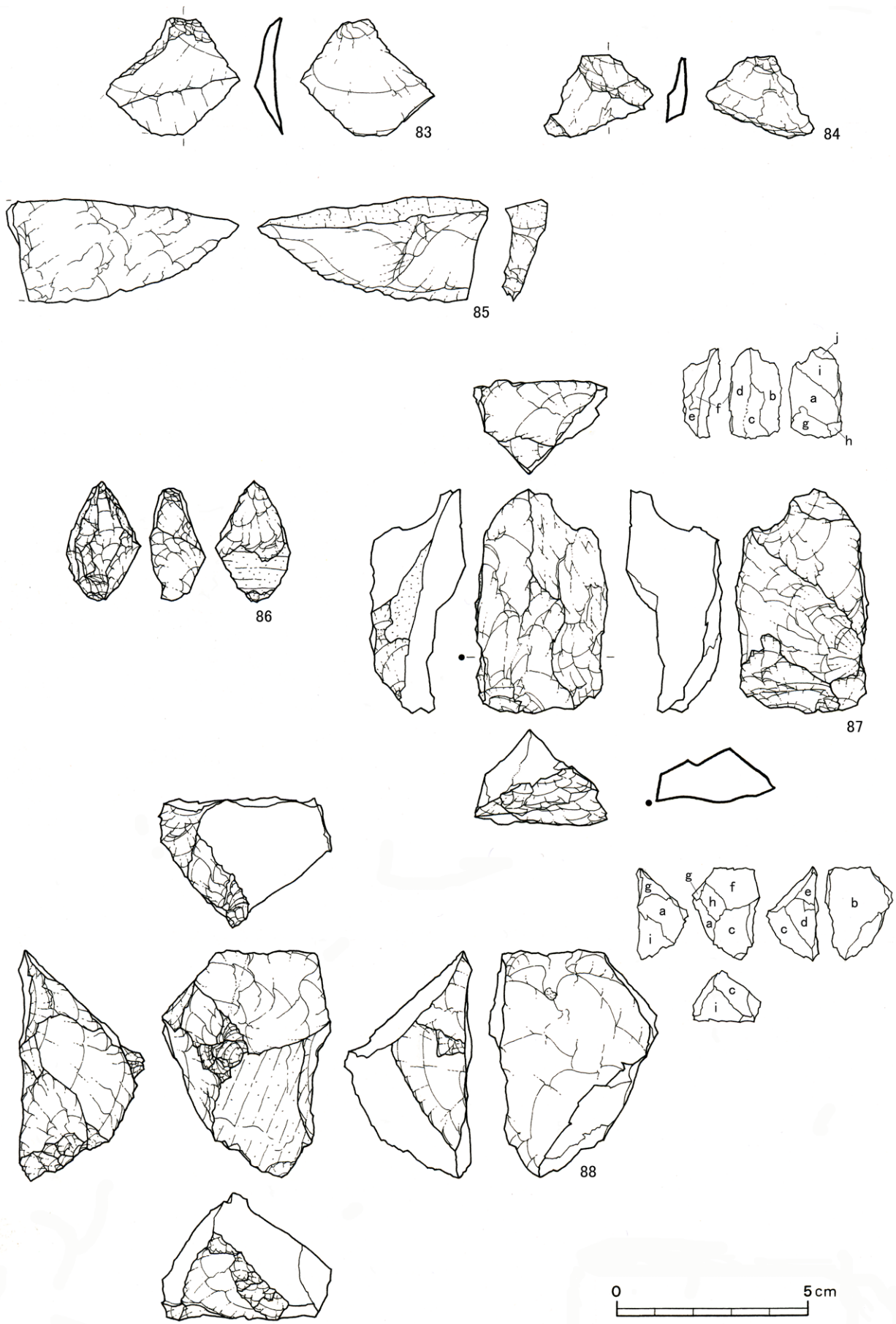


图 11 遺物実測図 10 (2:3) (M0 地点 - 8)

とは大きく異なり貧弱である。偶発的な剥離の可能性もあるがここでは使用痕状の剥離痕のある剥片として扱った。

69のa面は打点部周辺ではネガティブな状態が強い剥離面で、下辺に大きな剥離痕と節理面から成るb面がある。背面には左側辺のc・d・e面、右側辺のf・g・h面、中央稜部のi面があり、c～f面は平坦な剥離痕又は節理面、g・i面は不規則な剥離を見せる複数の剥離痕から成る。h面はc面を打面としている。j面はb面との境部分にある使用痕状を呈する剥離痕群である。当資料についてはa面にネガティブな状態が強いものの62の例を見る限りネガポジの判断が難しい資料といえる。そのため、当資料の素材については多面体の剥離痕から成る石核を半裁したブロック状の剥片とした。

剥片 (70～85)

剥片は、1類：縦長状を呈するもの(70～78)、2類：長さとの比率が近い不定形なもの(79～82)、3類：横長状を呈するもの(83～85)に分類した。

1類は縦長状を呈し幅に対して長さの比が1.5前後かそれ以上のもので、背面に剥片剥離軸と並行する稜線を1～2本程度有するものが多く、70(61.57g)、71(21.27g)以外は20g以下である。平坦な剥離面打面の70・72・74・76以外は、打点破碎により打面が殆ど失われているか線状となっている。また、主要剥離面の下端などにバルブや小剥離痕を持つものに70・75・78があり77もその可能性が高い。特に78では主要剥離面の打点部以外の下辺両端にもバルブがあり、背面側にも主要剥離面と同一打点の複数のバルブを持つ剥離痕が広がっている。尚、70は石材が粗質で背面には複数の節理面と主要剥離面とは反対方向の剥離痕があり、73・75などと共に両設打面の石核が想定される。71は背面に1段階前の剥片の主要剥離面があり、各辺に微細な剥離痕が散見される。また77は背面の大半が節理面から成り、打面は加撃時に2/3程度を薄く剥落しており主要剥離面は石材中の節理面のため不規則な剥離を示している。表裏面縁に小規模な剥離痕状の面がみられるが、面の荒れか剥離痕かは判断し兼ねる。70の剥片剥離角度は約95度である。

2類は不定形で長幅の比が1:1前後のもので、打面幅近くに最大幅があり剥片の下端にかけて幅を減じるもの(79・80)と、両側辺が並行気味となるもの(81・82)がある。79・80・82が平坦な剥離面打面で、81は打点破碎で線状となっている。背面構成は、79・80は同一打面で打点が左右に振れる方向の剥離痕を、81は横方向の剥離痕を、79・81・82は反対方向の剥離痕が観察される。剥片剥離角度は79が120度、80が122度、82が76度である。

3類は横長状を呈するもので長さに対して幅の比が1.5前後かそれ以上のものとしたが例数は少ない。85は平坦な節理面を打面とし背面にはポジティブとみられる剥離面をとどめ打点で半折しており、剥片剥離角度は100度前後とみられる。83の背面には、下辺の節理面状の平坦面と主要剥離面とほぼ同一方向で横に振れる複数の剥離痕を留め、打面は線状となっており背面左端を欠損している。加工痕のある剥片(61)を含めても4例で、うち84は調整剥片様の小規模なものである。

尚、未報告資料の剥片73点のうち節理面や階段状剥離などによるものも含め折れ面状を呈する例が6割余りあり、節理面などの出現頻度の高い当石材の材質の一端が示されている。

石核 (86～90)

石核は、1類：双多角錐形を呈するもの(86)、2類：平坦打面でa—同一作業面の対向する二辺で作業を行うもの(87)とb—平坦打面の周囲に作業面を設けるもの(88・89)、3類：石核の両端に打面がある両設打面のもの(90)に分類した。

1類の86は両端にバルブを有し最大値が中位にあるため縦断面形態が紡錘形を呈する双多角錐形のもので、右図下半に平坦な節理面を残す以外は両端からの剥離により構成されており、打点部は両端に収束し点状を呈している。

2a類の87は石核両端に平坦な剥離痕を打面とした作業面を設けている。a面は素材剥片の主要剥離面で、平坦な剥離痕b面を石核底面とする横長状の剥片を素材としており、f面の自然面風な節理面が素材剥片の打面とみられる。石核両端の辺で各々2回の剥離作業(g・h面とi・j面)が確認され、復原剥離角度は上端のi面で125度、

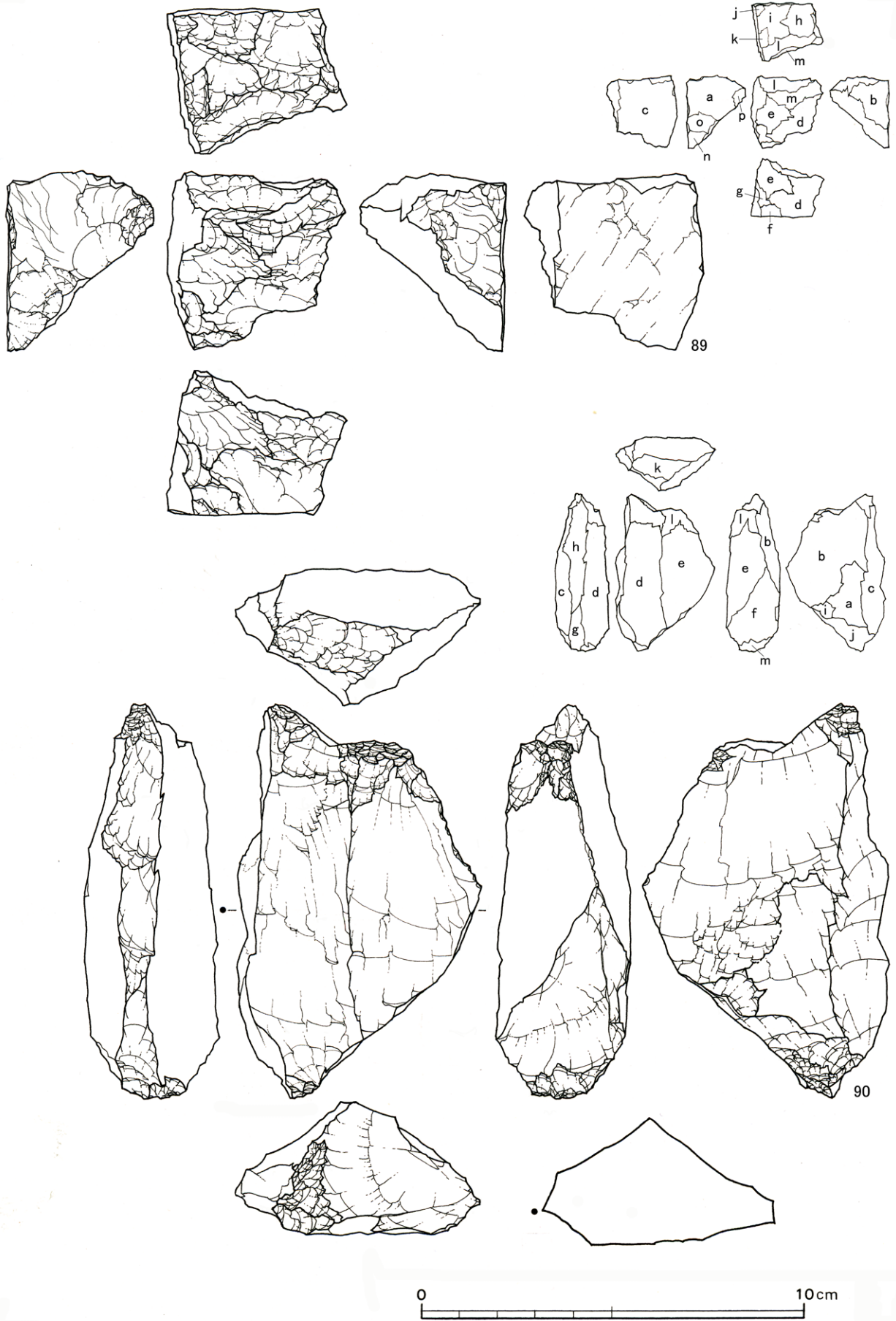


图 12 遺物実測図 11 (2:3) (M0 地点 - 9)

下端の g 面で 130 度である。また、c・d 面については境の稜線部の状況から同時に形成された面の可能性が高いものと思われる。

2b 類のうち 88 は平坦打面の周囲に作業面を設けるもので、打面の転位もみられる。a 面が素材剥片の主要剥離面で、b 面は一段階前の素材剥片の分割面にあたり、ネガ・ポジ双方の要素が見受けられる。背面には薄い剥落面である f 面の他に、b 面を打面とする d・g 面と、節理面の c 面を打面とする h・i 面がある。e 面は b 面形成前段階の剥離痕である。d 面の打点は不明瞭でバルブも平坦であり復原剥離角度は 100 度、i 面は 113 度である。また g 面は剥離途中で屈曲しており、最終剥離痕にあたる f 面は偶発的な浅い剥落面とみられる。

89 は 3 面に平坦な節理面を持ち打面の転位もみられる。素材剥片の主要剥離面は節理面の a 面とみられ、やや不鮮明ではあるが打点に向かってフィッシャーが収束する状況を示している。b・c 面はネガティブな節理面とみられ、b 面でも不鮮明ではあるが打点に向かうフィッシャーの収束とみられる状況が確認される。最も古い段階の剥離は l 面とそれを打面とした m 面であり、次いで c 面を打面に h 面→i 面→j 面や f 面→d 面と n 面などを剥離、その過程で打面を転位し a 面から e・g・k 面、e・g 面側から o・p 面などを剥離している。復原剥離角度は h 面が 94 度、i 面が 80 度である。尚、彫刻刀形石器 (57) についても作業面を一辺に持ち打点が打面縁を移動する 2 類石核を素材としているものと考えられる。

3 類の 90 は剥片素材の石核で、a 面が主要剥離面とみられる。腹面側では a 面→b 面→c 面の剥離順を示し b 面は k 面により打面部を失っている。背面側では d 面→e 面、その左側辺では g 面→h 面、右側辺では e 面と i・j 面→f 面の剥離順を示す。尚、g・h 面は c・d 面に、e 面は b 面に後続する。d 面は下端にもバルブがみられ、b・d・e・h 面が上の打面 (k 面) 側からの剥離方向を、c・g 面が下の打面 (f 面) 側からの剥離方向を示す。上辺の k 面は左側辺から剥離されておりその打点周辺は h 面側を中心に潰れ痕が集中しているが、側面である e 面の打点周辺などにも潰れ痕 (l 面) が観察される。下辺の f 面は e 面下半から剥離され d 面下端のバルブ付近を薄く剥離している。この f 面でも g 面の打点部周辺を中心に潰れ痕 (m 面) が集中している。これらの潰れ面は j 面などの腹面側にもみられるが、上辺の k 面とは異なり下の打面とした f 面の下辺部を中心に広がっている。

これら剥離の状況などから、当資料は k・f 面を打面、b・d・e 面を側面調整と考え、c・g・h 面を作業面とした両設打面の縦長状剥片の石核として分類した。尚、作業面のうち c 面は腹面側に打撃が振れるため幅広気味の剥片が想定され、h 面では途中と下辺に段が生じる変則的な剥離を示している。h 面の復原剥離角度は打点周辺の破碎ため不明瞭であるが 120 度前後とみられる。

ただ、f 面下辺付近にみられる潰れ痕の m 面を台石上での剥離に伴う潰れ痕と捉え、e 面上部の潰れ痕 (l 面) や d 面下端のバルブの存在を考慮すれば、当石核については両極剥離技術を用いた縦長系剥片石核との解釈も可能で、その場合は側面調整とした b・d・e 面も目的剥離の一環として解釈される可能性もある。

3. 流紋岩製石器資料を中心とした M0 地点のまとめ

縄文時代の資料については、平坦剥離で打面転移や打面と作業面の入替え、打点が左右に触れる剥離などが想定され、石鏃では細身のものが目立つ。爪形文土器については 86 報告でⅡ類 (早期) に分類されている。

流紋岩製の石器資料群については単一の石材を用いたもので、節理面などの出現頻度が高く、剥離面でのうねりや剥離方向にばらつきなどが生じる例が多いため石材の質感は粗い。採集資料のため正確な出土層準は断定できないが、同一地点の縄文前期資料とは異なりより下位の黄褐色粘質土層中への包含が想定され、限定された範囲で採集されている。

製品では、ナイフ形石器は基部加工を基本とし縦長状の剥片を素材とするもの、不定形剥片を素材とした切出し状のものや先端具状のものなどがあり、大型の錐形石器 2・3 類及び尖頭状の削器などが特徴的である。尖頭状の削器と仮称した資料については加工状況等から着柄と手持ちでの使用をそれぞれ想定した。また、加工が粗雑で鋸歯縁状加工を想起させる削器や錐形石器 3 類・彫刻刀形石器などで、複合的な機能の存在が窺われる。

剥片は報告資料中では縦長状の 1 類が中心で不定形な 2 類が若干あり横長状の 3 類は例数が限られる。剥片 1 類は石核 1～3 類に、剥片 2 類は石核 2 類にそれぞれ対応する要素が見出せる。剥片 3 類に対応する石核は確認されていないが、彫刻刀形石器 57 が示すように平坦打面である石核 2 類の中に剥片 3 類の対象となる石核も含ま

れるものとみられる。また、剥片 1 類の 70・73～75 にみられる厚めの断面形態と背面の稜や両設打面などについては石核 3 類の示す要素とも符合する。剥片剥離角度は、計測可能な例数は少ないが剥片は 3 例で平均 106 度、石核は 6 例で平均 107 度、製品は 7 例で平均 98 度となり、製品・剥片・石核の平均値は 104 度である。

重量分布では、報告した流紋岩製資料 49 点のうち 10g 未満が 16 点と最も多く、20g 台を含めると全体の 65% を占める。また、100g 台以上のも 6 点のうち使用痕状の剥離痕のあるブロック状の剥片 2 点 (123.90g と 224.50g) については、他の剥片類の殆どが 20g 以下であるのに比べ際立って重く、剥離過程や形状などからみて大型製品類の素材である可能性も考えられる。

剥片剥離技術では、顕著な両極剥離と石核 3 類 90 による側辺での縦長剥片剥離が挙げられ、横長剥片剥離に関しては断片的である。このうち石核 3 類では、側面に打撃が振れる幅広な剥離や変則的な剥離が生じるなど規格性のある縦長剥片の量産という要素は余り満たされていない。また両極剥離に関しては、剥片剥離角度は 100 度前後が中心で平坦な剥離面・痕、剥離面・痕下方でのバルブや小剥離痕の存在、双多角錐形を呈した石核、打点から鉛直方向に派生する稜の存在、ツインバルブを含め同一剥離面・痕に複数ヶ所のバルブを有す例、それらの打点が背面側剥離痕の打点と共有されている例、平坦な剥離面・痕で打点にフィッシャーが収束する例などの要素が挙げられる。その技術は剥片 1 類や石核 1・3 類などの剥片剥離技術に留まらず、大型資料である尖頭状の削器や錐形石器 3 類の素材剥片の加工にも用いられている。

この流紋岩製石器資料については、石器組成として一部の錐形石器を含む大型の尖頭具類と基部加工ナイフ形石器や鋸歯縁状の加工を施した削器が特徴的で、錐形石器・彫刻刀形石器・加工痕のある剥片などの小型石器が認められる点も挙げられる。更に、これらの石器類は単一の使用石材に加えて製品・剥片・石核など全体を通して両極剥離の要素が認められるなど、資料の同時性が強く示されている。

考察

今回の報告資料について、M0 地点の流紋岩製石器資料を中心に整理を行う。

児玉氏採集資料ではナイフ形石器と搔器が挙げられる。当遺跡群内では既報告のナイフ形石器は縦長(状)剥片素材の 10 点、横長剥片素材の 5 点の合計 15 点が確認されているが、二側縁加工のものは C4 地点例 (16 追加報告, 第 3 図 7) があるものの、1 のような平刃タイプのもは初例である。また、2 と同じく基部加工で断面形態が三角形を呈するナイフ形石器には 86 報告の 6 と 43 (20 追加報告で再報告, 第 4 図 50) があり、類似する形態として北広島町苅屋形遺跡 B 地点例 (07 追加報告, 第 5 図 3) が挙げられる。このうち 1 については、廿日市市冠遺跡群スキー場地点 (加藤・三枝 1992, 第 5 図 4)、岡山県早風遺跡群野原 A 地点ユニット A (平井 1979, 第 19 図 8 など) などの類例がある。20 追加報告で報告した縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器 (20 追加報告, 第 1 図 7) と同じく後期旧石器時代前半でも古い段階に遡る可能性の高い資料といえる。

既報告の搔器については G 地点 11 点、地点不明 2 点の合計 13 点あり、今回の 2 例を合わせて合計 15 点となり、安山岩製の 1 点以外は全て黒曜石製の縦長剥片素材のものである。形態的にも整ったもので、搔器の比率が低い中国及び近畿地域では際立つ存在といえる。

M0 地点の流紋岩製石器資料について

使用石材

使用石材である硅質凝灰岩系の石材は聖湖周辺に広く分布する高田流紋岩類に属するもので、当地点はその分布域の中に NE - SW 方向に貫入岩 (花崗斑岩質の岩石) が分布する境界付近 (柴田 1991) に立地している。岩質分類で確認した同一資料中での岩質の変化等については、貫入に伴う熱変成作用等により高田流紋岩類の内部に生じた漸位的な熱変質を示している事も考えられる。石材の採取地は未確認であるが、このような石材の状態を見る限りでは近隣での採取も選択肢に含まれるものと思われる。

また、当遺跡群で既報告資料中の流紋岩系石材 5 例は全て凝灰質のもので、今回のような高田流紋岩類に含まれる硅質凝灰岩系のもは確認されていない。同じく高田流紋岩類を多用する三次市下本谷遺跡配水池地点 (三枝

2007a)においても凝灰質が中心を占め、M0 地点例に近い質感のものは石核(桑原・中田 1980, 報告第 21 図 5)、ハンマーストーン(三枝 2007 a, 第 16 図 21)、剥片(同第 21 図 41)など例数は少ない。その他に下本谷Ⅱ期古段階とした東広島市五楽遺跡のナイフ形石器(三枝 1988, 第 2 図)も似た質感の石材である。

ナイフ形石器

ナイフ形石器は全て基部加工を中心とした部分加工のもので、42・43 については下本谷Ⅰ期の縦長状剥片を素材とするナイフ形石器ⅠB類(三枝 2017, 第 1 図 6・7)に比べて加工が明瞭となるなど後発的な感を受ける。また、やや寸詰まり気味の 2 点のうち 45 については厚味のある切出系のものと考えられるが、44 については先端具として把握した。共に下本谷Ⅰ期にはみられない形態である。

素材剥片や加工状況などから、42 では基部加工が背面側という相違はあるが宮崎県東睦原第 1 遺跡の後期旧石器時代第 1 期例(大山 2006, 第 10 図 4)に、43 については静岡県ヌタブラ遺跡例(高尾・遠藤 2003, 第 10 図 13)又は中見代第Ⅰ遺跡例(高尾 1995, PL.1 - 1)などに近いものと考えた。

尖頭状の削器

尖頭状の削器と仮称した資料については断面形態が三角形を呈する大型資料で、加工は先端部にかけての背面稜部の加工と器体下半の各辺稜部を中心とした加工に分けられる。器体下半部などの加工痕の状況から着柄と手持ちの 2 形態を想定した。

着柄を想定した 54 については、類似する要素が見られる例として弥生時代後期を中心とした集落遺跡である東広島市中屋遺跡 B 地点から出土した、粗質の流紋岩系石材を用いた基部加工尖頭具の例(三枝 1999, 第 68 図 451)が挙げられる。この遺跡からは各種の打・磨製石器類と共に、両極剥離を用いた砥石の製作過程を示す資料などが出土している。当該資料については基部加工を施す断面三角形の細身の尖頭具で、先端部が磨耗痕に覆われている事などから着柄使用の農耕用刺突具と考えた。ただ、着柄が想定される尖頭具で使用石材や断面形状などの類似点はあるものの、より細身で基部に限られた稜部加工や先端部の磨耗など相違が大きく、双方に共伴する石器資料の比較も含め今回の M0 地点の流紋岩製石器資料群との関連性は見出せない。また、この事例以外で縄文・弥生時代の類似例は把握していない。

器体下半部への加工に若干の相違はあるようだが、規模や断面形状と尖頭部の加工状況などの点で熊本県石の本遺跡 8 区の尖頭状石器(池田 1999, Fig31 3445)が最も類似性が高いと考えられる。55 についても尖頭状を呈した石器類の大型資料とみられるが、対比可能な類例を把握できていない。

錐形石器

錐形石器のうち 2 類の大型資料については、下本谷遺跡配水池地点のナイフ形石器ⅢB①類(三枝 2017, 第 1 図 4)の刃部の一端に類似する要素を見出すことができる。また 3 類については、素材面を広く残し肉厚な素材の一端に加工を施すなどの点で石の本遺跡 8 区でピックとして報告されている資料(池田 1999, Fig27・28)との類似性が高い。

錐形石器は大型品 4 点、小型品 4 点の計 8 点あり石器組成中に一定の割合を占めている。中でも大型資料は尖頭状の削器などと共に大型尖頭具を特長付ける要素を示している。また、3 類については基部側辺での搔器様の使用も想定される。

削器

削器については、大型資料(58・59)に施された粗目の加工に鋸歯縁状の加工の要素が見受けられる。60 については小型の尖頭具としての別器種を想定する必要もある。

彫刻刀形石器類

彫刻刀形石器のうち大型品の 57 については、平坦打面の 2 類石核を半裁して整形しているが、彫刻刀面の剥離

痕がやや浅く不明瞭なため型式として成立するか否か不安定さが残る。今後の類例を待ちたい。

その他の石器類

加工痕のある剥片とした61については、先端部の加工を錐形石器として把握可能か、若しくはその刃部裏面の剥離痕を彫刻刀面として把握可能か判断しかねる。これについても今後の事例の蓄積を待ちたい。また使用痕状の剥離痕のある剥片とした64・65については、端部の小剥離痕を加工痕と捉えれば台形様石器Ⅲ類（佐藤1988）などに該当し、北広島町地宗寺遺跡（三枝・鍛冶1982）と同じく部分加工のナイフ形石器に分類可能性であるが、例数が少ないためここでは剥離痕のある剥片とした。同じく67については上辺の線状の打面と直線的な下辺にそれぞれ微細な剥離痕が観察される事から、削器状の使用を考えた。

剥片剥離技術

剥離技術の面では、石核側辺での縦長剥片剥離と両極剥離が挙げられ、横長剥片剥離では例数は少ないものの平坦打面で打面転位を行うものや同じく打面縁を打点が移動し平坦な石核底面を有するものなどが想定される。

石核側辺での縦長剥片剥離については、備讃瀬戸地域を中心とする備讃瀬戸型石刃技法（佐藤1987）がある。石核側辺での縦長剥片剥離の主なものとして岡山県恩原2遺跡S文化層（稲田編1996, Fig36 - 125・126）、庄原市佐田谷遺跡（三枝・戸田2009, 第14図58）、下本谷遺跡最高所地点（三枝・戸田2009, 第7図18）、苅屋形遺跡B地点（三枝2007b, 第6図18）、樽床遺跡群G地点（三枝2020, 第1図6）、冠遺跡群A地点（梅本1983, 第5 - 78図）・同B地点（梅本1983, 第5 - 130図）・同12グリッド（大上ほか1998, 第28図114）などが挙げられる。これらは単設打面を中心とした恩原2遺跡・佐田谷遺跡・冠遺跡群例などと、打面と作業面を入替えるなどの打面転位がみられる下本谷遺跡最高所地点や樽床遺跡群G地点及び苅屋形遺跡B地点例などに大別される。このうち両極剥離に関連するとみられるものとしては佐田谷遺跡例が挙げられる。当例は扁平な水晶製剥片を素材とする単設打面のもので、下辺縁に対向する方向の剥離痕を留めており台石上での剥離が想定されている。両設打面の縦長剥片石核として分類した当遺跡の石核3類90は、側辺での縦長剥片剥離という点では備讃瀬戸型石刃技法にも共通する。しかし両側面での剥離過程で打面が再成され打面縁の潰れ痕が作業面と考えられる側辺以外にも広がる事や側面の剥離に明瞭な両極剥離痕跡を留めている事などから、同技術を用いた幅広のものを含む縦長系剥片の石核とも考えられる。剥片・石核の例数が少なく類似する事例も乏しいため備讃瀬戸型石刃技法との関係を含めて今後の課題としたい。

両極剥離については、当石器群では鈍角的な剥離や上下両端のバルブ等々小林氏による両極剥離の研究（小林1973・1984）で提示された要素の多くが確認された。また縦断面が紡錘形を呈する双多角錐形の石核については、柳田氏により紹介（柳田・梶原2018）された両極剥離のうちの垂直両極剥離の一類型にあたる。先述した使用痕状の剥離痕のある剥片67についても、この垂直両極剥離により生じた可能性がある。

両極剥離の旧石器時代の事例としては、前述の佐田谷遺跡例以外では以下の事例が挙げられる。下本谷遺跡配水池地点では剥片下辺にバルブ状の収束が認められる3例（三枝2007a, 第20図32・第23図67。三枝・戸田2009, 第5図9）、庄原市向泉川平1号遺跡第Ⅲ文化層では当遺跡の石核1類の要素がみられる削片状を呈した石核（唐口ほか2013, 第Ⅲ - 50図80）、三次市風呂谷遺跡では剥片下辺に明瞭なバルブを有す剥片（川崎ほか2014, 第103図82）、東広島市三ツ城古墳墳丘下出土の流紋岩製ナイフ形石器の整形に同技術が用いられている例（三枝1992, 第3図1。石井・三枝2004, 第143図393）、後期旧石器時代～縄文時代にかけての安山岩原産地遺跡である廿日市市頓原遺跡で主要剥離面下辺に小剥離痕が生じる例（三枝1983, 第4 - 19図28）などがある。確認した遺跡数は比較的多いものの各遺跡内における剥片剥離の中では例数も僅少で散発的な存在といえる。

また、縄文時代のものとしては前述の風呂谷遺跡で縄文期とされているブロック状の剥片下辺に台石上での剥離を感じさせる剥離の乱れが窺われる例（川崎ほか2014, 第105図94）が挙げられるが、縄文・弥生時代に属するものについては先述の中屋遺跡B地点例以外では同技術が顕著に確認される事例を把握していない。

筆者は広島県内の偽石器資料について言及（三枝2016a）した事がある。それらの多くは表採資料のため正確な出土層準を確認出来なかったが、備北層群（岡本1987）などの第三紀層や更新世前期に遡る山砂利層（大西

2001)などの土層に起因すると考えられる。一度の剥離で複数の面を成すかのような例、剥離面・痕下辺でのバルブの存在、鈍角剥離、ツインバルブや一面に複数のバルブを有する半裁状の礫、円礫表面のクラック部分から剥離痕が形成されあかも石器のような形態を示す礫片などである。それらの資料は現地の状況から前述の自然土層への帰属が強く推される事もあり、現時点においても自然為として認識している。

これに対して、当 M0 地点の流紋岩製石器群は同一石材を用い石核・剥片から製品に至る過程に一連の両極剥離技術が用いられると共に他遺跡との類似資料も含むなど、報告資料中に人為資料を否定する要素は見出せない。このように、今回確認した両極剥離に関する要素と筆者が前述の如く自然為として捉えた諸要素に共通点が多い事から、それらが人為・自然為の双方で生じ得る事を認識した次第である。今後この両極剥離については人為・自然為の峻別とその指標等が問われる場合もあると思われるが、西中国山地一帯でこの剥離技術がどのような展開を見せるのか注視したい。

所属・時代

筆者は、下本谷遺跡配水池地点の流紋岩製石器群の再検討(三枝 2017)を通して下本谷 I・II 期を設定、I 期を基部加工などのナイフ形石器を指標に群馬県権現山遺跡第 2 地点(相沢・関矢 1989)・長野県竹佐中原遺跡・宮崎県後牟田遺跡第 III 文化層などと同時期中期旧石器時代後半～末に、II 期を横長状剥片素材の基部加工ナイフ形石器などから南関東の X a・b 層に対応する新・古段階への区分を想定した。その上で、同 II 期における横長剥片素材の基部加工ナイフ形石器 II B 類の展開を通して、基部加工が素材剥片の剥離技術の枠を超えた現象として現れたと考えた。

この変遷案に沿えば、当 M0 地点の基部加工ナイフ形石器については、加工や形態等から下本谷 I 期に後続する可能性が高いものと思われる。更に尖頭状の削器や錐形石器 3 類の類例として、下本谷 II 期(新)段階への対比を想定(三枝 2017)した石の本遺跡 8 区の資料が挙げられるなど、当流紋岩製石器資料については下本谷 II 期の範疇での把握が妥当と考えられる。また、これにより不明瞭であった同 II 期における縦長系剥片を素材とした基部加工ナイフ形石器の展開が示されるものと思われる。

今回報告した流紋岩製石器資料については、採集資料という制約はあるものの使用石材や剥離技術などから資料としての一括性が高いものと考えられる。その所属時期については、ナイフ形石器・錐形石器・尖頭状の削器などの類例を通して後期旧石器時代初頭にあたる下本谷 II 期への対比を考えた。今後、当資料群を特徴付ける両極剥離と尖頭系の石器類について検討を進めると共に、石材の産出地及び採取法方等の確認と樽床遺跡群内外への同種石材の広がり把握する必要がある。

謝辞

本文の作成にあたり、赤そばの里会長・高木茂氏及び認定 NPO 法人西中国山地自然史研究会・上手新一氏にはそれぞれ所蔵資料の報告について快諾を得ると共に様々な便宜を図っていただきました。また東北大学・柳田俊雄氏、同人会旧石器文化談話会・佐藤良二氏には関連する論文の提供を受けると共に貴重なご助言を、考古地質学研究所・柴田喜太郎氏には石材並びに聖湖周辺地形や地質等についてご指導を、岡山理科大学・白石純氏ならびに吉井宣子氏には関連する論文の提供を、魚津市歴史民俗資料館・麻柄一志ならびに長野県立歴史館・鶴田典昭氏には当報告に際しコメントをいただきました。更に北広島町芸北高原の自然館・白川勝信氏には当誌への掲載などに関して、認定 NPO 法人西中国山地自然史研究会・上野吉雄氏には今回の追加報告をはじめ多岐にわたって便宜を図っていただき、公益財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室・岩本芳幸氏と順田千織氏には関係する資料や図書調査などについて便宜を図っていただきました。文末ですが記して謝意を表します。

引用文献

相沢 忠洋・関矢 晃(1989) 赤木山麓の旧石器：210 - 219. 講談社, 東京

- 平井 勝 (1979) 野原遺跡群 早風 A 地点. 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (32). 岡山県文化財保護協会, 岡山
- 池田 朋生 (1999) 石の本遺跡群Ⅱ—熊本市平山町所在の旧石器時代遺跡— 第 54 回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査. 熊本県文化財調査報告 第 178 集. 熊本県教育委員会, 熊本
- 今村 外治 (1969) 八幡高原の地質 特に八幡盆地の湖成層について. 三段峡の陸水と生物 総合学術調査研究報告, 260-274. 広島県教育委員会, 広島
- 稲田 孝司 編 (1996) 恩原 2 遺跡. 恩原遺跡発掘調査団, 岡山
- 石井 隆博・三枝 健二 (2004) 西条中央七丁目 史跡三ツ城古墳発掘調査報告書—史跡三ツ城古墳保存整備事業に係る発掘調査—. 文化財センター調査報告書 第 42 冊. 東広島市教育文化振興事業団, 広島
- 唐 勉三・下岡 順直・川端靖子・長友恒人・パリノサーヴェイ株式会社・株式会社古環境研究所・有限会社遺物材料研究所 (2013) 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (25) 向泉川平 1 号遺跡 向泉川平 2 号遺跡. 広島県教育事業団発掘調査報告書 49 集. 広島県教育事業団, 広島
- 加藤 謙・三枝健二 (1992) 冠遺跡群Ⅰ—1991 年度の調査—. 広島県教育委員会, 広島
- 川崎 真二・パリノサーヴェイ株式会社・藁科 哲男・大澤 正己・鈴木 瑞穂 (2014) 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (31) 風呂谷遺跡・風呂谷古墳. 広島県教育事業団発掘調査報告書 59 集. 広島県教育事業団, 広島
- 小林 博昭 (1973) バイポーラルテクニックについて—実験的方法からの研究—. 考古学ジャーナル, 78:8-13
- 小林 博昭 (1984) バイポーラルテクニック. 考古学ジャーナル, 229:2-6
- 桑原 隆博・中田昭 (1980) 下本谷遺跡発掘調査概報. 広島県教育委員会, 広島
- 岡本 和夫 (1987) 中国地方地学辞典 (中国地方地学辞典編集委員会編). 中国新聞社, 広島
- 大西 郁夫 (2001) 日本の地質 7 中国地方 (日本の地質「中国地方」編集委員会編). 共立出版, 東京
- 大上 裕士・沖 憲明・柴田 喜太郎 (1998) 冠遺跡群Ⅴ—1991～1996 年度の調査—. 広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター, 広島
- 大山博志 (2006) 東畦原第 1 遺跡 (三・四次調査). 東九州自動車道 (都農～西都間) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 33. 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 128 集. 宮崎県埋蔵文化財センター, 宮崎
- 三枝健二 (1983) 4 頓原遺跡. 中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (4), 91-130. 広島県教育委員会, 広島
- 三枝 健二 (1988) 東広島市西条町採集の石器. 芸備, 19:13-16
- 三枝 健二 (1992) 東広島市内出土の旧石器. 芸備, 22:33-37
- 三枝 健二 (1999) 中屋遺跡 B 地点発掘調査報告書Ⅱ. 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 181 集. 広島県埋蔵文化財調査センター, 広島
- 三枝 健二 (2007a) 下本谷遺跡の基礎的研究—三次市西酒屋配水池建設に伴う旧石器時代の調査から—. 三次旧石器文化研究会, 三次
- 三枝 健二 (2007b) 平成 18 年度テーマ研究に伴う県内旧石器関係資料報告. 広島県立歴史民俗資料館研究紀要, 6:30-41
- 三枝 健二 (2016a) 広島県内採集の偽石器資料について, 三旧研アーカイブス. 三次旧石器文化研究会 <http://miyoshikysekki.blogspot.com> (2020.12.22 確認)
- 三枝 健二 (2016b) 広島県内旧石器資料報告 (2), 三旧研アーカイブス. 三次旧石器文化研究会 <http://miyoshikysekki.blogspot.com> (2020.12.22 確認)
- 三枝 健二 (2017) 下本谷Ⅰ・Ⅱ期の再検討 (2), 広島文化財研究, 2:1-41
- 三枝 健二 (2020) 樽床遺跡群の追加資料報告. 広島県立歴史民俗資料館研究紀要, 9:1-20
- 三枝 健二・鍛冶 益夫 (1982) 地宗寺遺跡発掘調査報告—国道 261 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査—. 広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター, 広島
- 三枝健二・戸田正勝 (2009) 広島県北東部における後期旧石器時代初頭の石器文化について—下本谷遺跡範囲確

認調査資料の再検討から一，広島県立歴史民俗資料館研究紀要，7：1-28

佐藤 宏之（1988）台形様石器研究序論，考古学雑誌，37（3）：1-37

佐藤 良二（1987）備讃瀬戸型石刃技法についての覚書，花園史学，8：20-30

柴田 喜太郎（1991）各論Ⅱ 表面地質図．土地分類基本調査 木都賀・三段峡，25-31．広島県，広島

高尾 好之（1995）第1期の石器群 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集．静岡県考古学会シンポジウムⅨ，19-21．静岡県考古学会，静岡

高尾 好之・遠藤 仁（2003）ヌタブラ遺跡発掘調査報告書 本川根町文化財調査報告書．本川根町教育委員会，本川根

梅本 健治（1983）5冠遺跡．中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4），177-334．広島県教育委員会，広島

梅本 健治・児玉 集・三枝 健二・柴田 喜太郎・辻 満久（1986）樽床遺跡群の研究，樽床遺跡群研究会編．芸北町教育委員会，芸北

柳田 俊雄・梶原 洋（2018）日本列島における「前期旧石器時代」の剥離技術—基盤技術への新しい研究視角—．九州旧石器，22：67-86

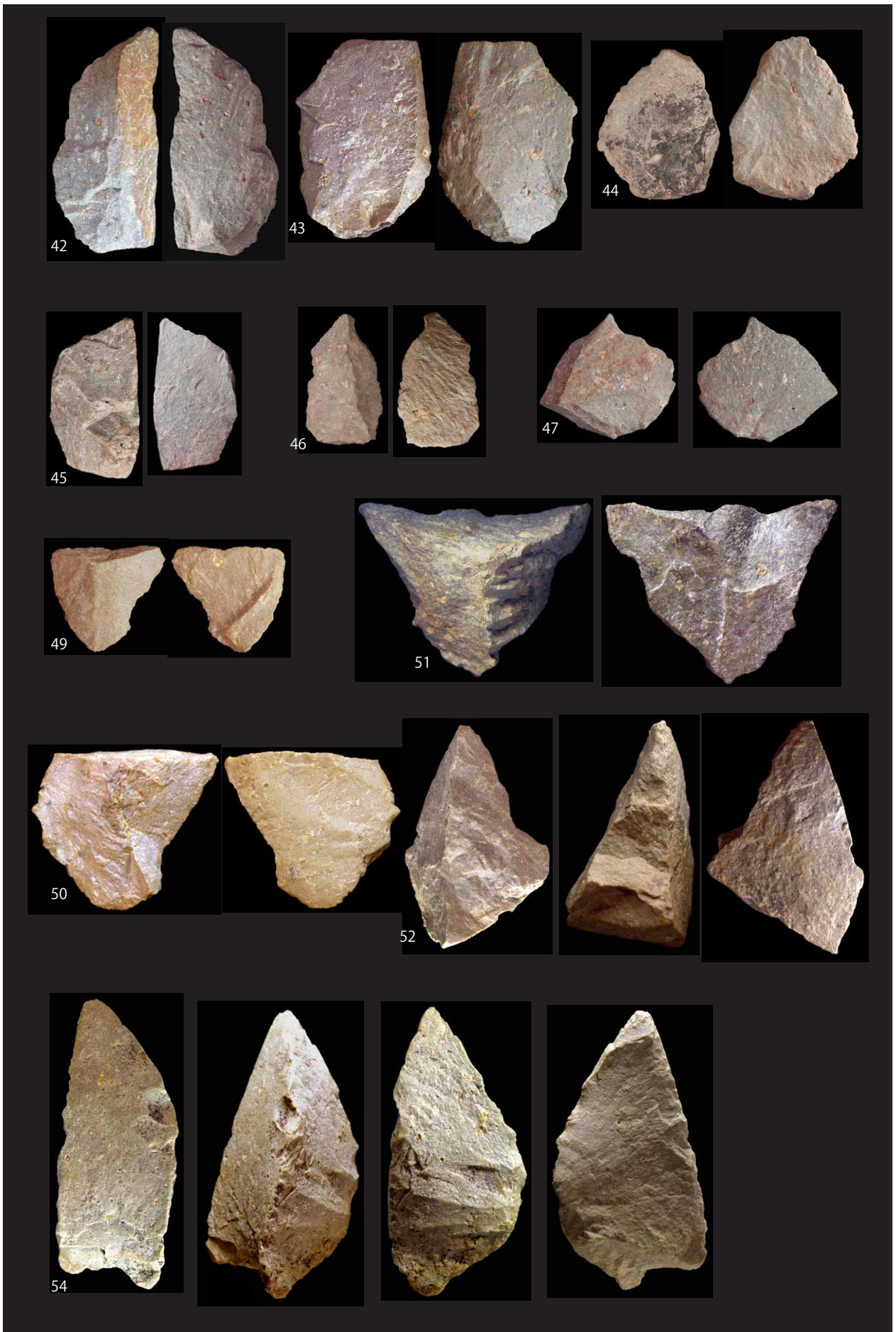
表1 遺物観察表 (安…安山岩, 黒…黒曜石, 流…流紋岩の略。岩質分類は86報告に準拠)

番号	資料名称	石材	法量 (cm・g)				剥離角度	地点	備考	
			最大長	最大幅	最大厚	重量				
1	ナイフ形石器	水晶	3.65	2.20	1.10	7.95	—	—	高木氏所蔵	仮-5
2	ナイフ形石器	安Ⅰ類	4.50	1.55	1.00	5.88	—	—	〃	仮-6
3	搔器	黒Ⅳ類	3.80	2.40	1.45	17.21	—	—	〃	仮-2
4	搔器	黒Ⅳ類	3.30	3.00	0.75	8.82	—	—	〃	仮-1
5	錐形石器	黒Ⅵ類	3.80	3.35	0.90	9.47	—	—	〃	仮-4
6	錐形石器	黒Ⅵ類	2.65	2.25	0.60	3.66	—	—	〃	仮-3
7	抉入削器	安Ⅰ類	4.55	6.95	1.40	33.22	122°	—	〃	仮-15
8	抉入削器	安Ⅰ類	5.75	2.25	1.00	14.52	—	—	〃	仮-13
9	削器	黒Ⅲ類	4.00	2.65	1.20	13.76	—	M1	上手氏所蔵	仮-044
10	削器	安Ⅰ類	4.80	3.85	1.40	17.64	—	—	高木氏所蔵	仮-20
11	石鏃(凹基)	安Ⅰ類	1.90	1.60	0.45	0.95	—	—	〃	仮-10
12	石鏃(凹基)	安Ⅱ'類	2.40	1.55	0.40	1.29	—	N1	〃	仮-9
13	楔形石器	安Ⅱ'類	3.25	2.60	0.70	7.57	—	—	〃	仮-7
14	楔形石器削片	安Ⅲ類	3.00	0.85	1.00	1.66	—	—	〃	仮-8
15	剥片	安Ⅱ'類	2.95	4.10	1.00	9.89	130°	—	〃	仮-22
16	剥片	安Ⅲ類	4.05	5.40	1.30	26.76	—	—	〃	仮-18
17	剥片	安Ⅰ類	6.30	6.90	1.60	55.62	—	N1	〃	仮-14
18	剥片	安Ⅰ類	5.20	4.60	2.00	35.84	118°	—	〃	仮-19
19	剥片	黒Ⅲ類	3.75	2.90	0.65	8.22	92°	—	〃	仮-23
20	剥片	安Ⅱ'類	3.95	2.80	0.75	7.70	99°	N	〃	仮-21
21	剥片	安Ⅰ類	5.55	3.30	1.20	19.88	98°	—	〃	仮-12
22	剥片	安Ⅱ類	7.40	5.65	1.20	51.71	110°	—	〃	仮-16
23	石核(剥片素材)	安Ⅲ'類	3.50	6.45	0.70	20.80	—	—	〃	仮-17
24	石核(円礫素材)	安Ⅱ類	4.35	3.40	3.70	69.12	—	N	〃	仮-11
25	削器	安Ⅲ'類	8.85	4.20	1.25	36.50	—	M0	上手氏所蔵	仮-001
26	石鏃(平基)	安Ⅱ類	2.25	1.05	0.35	0.69	—	M0	〃	仮-005
27	石鏃(平基)	安Ⅰ類	2.45	1.40	0.45	0.92	—	M0	〃	仮-006
28	石鏃(凹基)	安Ⅱ類	2.30	1.00	0.20	0.61	—	M0	〃	仮-241
29	石鏃	安Ⅱ'類	1.60	1.05	0.25	0.31	—	M0	〃	仮-004
30	石鏃(凹基)	安Ⅱ類	1.95	1.35	0.20	0.41	—	M0	〃	仮-242
31	石鏃(凹基)	安	2.10	1.50	0.30	0.70	—	M0	〃	仮-003
32	石鏃(凹基)	安Ⅲ'類	2.40	1.45	0.30	0.38	—	M0	〃	仮-007
33	石鏃	安Ⅱ'類	1.70	1.10	0.30	0.45	—	M0	〃	仮-243
34	石鏃未製品	安Ⅱ'類	1.75	1.30	0.20	0.75	—	M0	〃	仮-009
35	石鏃未製品	安Ⅰ類	1.65	1.30	0.20	0.44	—	M0	〃	仮-008
36	石鏃未製品	黒Ⅱ類	2.30	2.10	0.65	2.07	—	M0	〃	仮-002
37	石鏃未製品	安Ⅲ類	3.90	2.50	0.45	5.36	—	M0	〃	仮-244
38	楔形石器	安Ⅰ類	1.60	1.95	0.40	1.46	—	M0	〃	仮-010
39	削器片	安Ⅲ'類	2.40	2.55	0.45	2.60	—	M0	〃	仮-012
40	剥片	安Ⅲ'類	5.00	2.30	0.70	7.40	—	M0	〃	仮-013
41	剥片	安Ⅲ'類	2.70	3.05	0.80	3.87	121°	M0	〃	仮-011
42	ナイフ形石器	流Ⅱ類	6.40	3.20	1.35	25.17	—	M0	〃	仮-024
43	ナイフ形石器	流Ⅱ類	6.65	4.55	1.30	38.36	—	M0	〃	仮-022
44	ナイフ形石器	流Ⅱ類	4.15	3.25	1.10	14.89	—	M0	〃	仮-265
45	ナイフ形石器	流Ⅱ類	4.90	2.95	2.00	27.46	88°	M0	〃	仮-262
46	錐形石器	流Ⅱ類	3.10	1.90	0.70	3.75	—	M0	〃	仮-037
47	錐形石器	流Ⅱ類	3.65	4.00	1.10	12.85	—	M0	〃	仮-033
48	錐形石器	流Ⅲ類	5.70	3.10	1.45	23.78	—	M0	〃	仮-271
49	錐形石器	流Ⅱ類	2.60	2.75	0.90	5.10	—	M0	〃	仮-041
50	錐形石器	流Ⅱ類	5.10	5.75	2.00	42.93	—	M0	〃	仮-027

番号	資料名称	石材	法量 (cm・g)				剥離角度	地点	備考	
			最大長	最大幅	最大厚	重量				
51	錐形石器	流Ⅱ類	6.00	7.90	3.65	105.07	—	M0	上手氏所蔵	仮-018
52	錐形石器	流Ⅱ類	6.90	4.55	3.65	85.05	95°	M0	"	仮-269
53	錐形石器	流Ⅰ類	5.00	4.60	2.65	48.99	—	M0	"	仮-268
54	尖頭状削器	流Ⅱ類	8.10	4.40	2.30	77.50	—	M0	"	仮-014
55	尖頭状削器	流Ⅱ類	11.80	6.10	4.85	319.09	—	M0	"	仮-270
56	彫器	流Ⅱ類	4.50	2.65	0.55	16.87	104°	M0	"	仮-131
57	彫器	流Ⅱ類	7.90	4.55	2.65	99.70	—	M0	"	仮-016
58	削器	流Ⅱ類	9.85	5.95	3.40	186.49	—	M0	"	仮-015
59	削器	流Ⅱ類	5.00	6.20	2.90	76.53	90°	M0	"	仮-023
60	削器(尖頭状)	流Ⅱ類	3.00	2.05	0.75	4.89	—	M0	"	仮-266
61	加工痕有剥片	流Ⅱ類	2.80	5.60	0.85	13.43	118°	M0	"	仮-034
62	加工痕有剥片	流Ⅲ類	2.95	3.25	1.55	15.12	—	M0	"	仮-264
63	加工痕有剥片	流Ⅱ類	2.50	3.75	1.25	12.55	—	M0	"	仮-263
64	加工痕有剥片	流Ⅲ類	1.85	2.50	0.70	3.52	90°	M0	"	仮-043
65	加工痕有剥片	流Ⅱ類	2.60	2.20	0.90	4.64	—	M0	"	仮-255
66	使用痕有剥片	流Ⅱ類	1.55	4.05	0.95	5.89	—	M0	"	仮-040
67	使用痕有剥片	流Ⅱ類	4.50	2.90	2.50	27.11	—	M0	"	仮-267
68	使用痕有剥片	流Ⅰ～Ⅱ類	9.30	4.70	3.60	123.90	100°	M0	"	仮-261
69	使用痕有剥片	流Ⅱ類	8.70	5.85	4.45	224.50	—	M0	"	仮-038
70	剥片	流Ⅱ類	6.90	3.50	2.40	61.57	—	M0	"	仮-020
71	剥片	流Ⅱ類	6.65	2.55	1.60	21.27	—	M0	"	仮-026
72	剥片	流Ⅱ類	4.20	1.85	0.95	7.43	—	M0	"	仮-032
73	剥片	流Ⅱ類	2.85	1.55	0.60	2.51	—	M0	"	仮-257
74	剥片	流Ⅱ類	4.00	1.40	0.85	3.92	—	M0	"	仮-031
75	剥片	流Ⅱ類	4.50	2.15	0.95	9.31	—	M0	"	仮-030
76	剥片	流Ⅱ類	3.45	2.30	0.50	3.63	—	M0	"	仮-254
77	剥片	流Ⅱ類	5.00	3.00	1.10	18.94	—	M0	"	仮-260
78	剥片	流Ⅱ類	5.30	3.80	1.25	18.97	—	M0	"	仮-029
79	剥片	流Ⅱ類	3.65	3.40	1.10	13.44	120°	M0	"	仮-256
80	剥片	流Ⅱ類	3.10	3.40	0.90	6.95	122°	M0	"	仮-259
81	剥片	流Ⅱ類	(2.30)	2.35	0.60	3.75	—	M0	"	仮-258
82	剥片	流Ⅱ類	2.40	1.60	0.55	2.34	76°	M0	"	仮-035
83	剥片	流Ⅲ類	3.20	3.55	0.75	5.30	—	M0	"	仮-028
84	剥片	流Ⅱ類	2.20	2.85	0.60	2.31	—	M0	"	仮-036
85	剥片	流Ⅱ類	2.80	6.05	1.30	19.94	—	M0	"	仮-025
86	石核	流Ⅱ類	3.20	1.95	1.40	7.73	—	M0	"	仮-021
87	石核	流Ⅱ類	6.00	3.50	2.50	41.80	125°・130°	M0	"	仮-039
88	石核	流Ⅱ類	6.05	4.40	3.40	69.81	100°・113°	M0	"	仮-019
89	石核	流Ⅱ類	4.80	4.65	3.85	79.20	80°・94°	M0	"	仮-042
90	石核	流Ⅱ類	10.50	6.40	2.55	213.66	—	M0	"	仮-017

M0 地点採集の流紋岩製石器類写真（縮尺不同，2020 年 6 月 15 日 撮影 三枝健二）

- 42：ナイフ形石器背面・腹面
- 43：ナイフ形石器背面・腹面
- 44：ナイフ形石器背面・腹面
- 45：ナイフ形石器背面・腹面
- 46：錐形石器背面・腹面
- 47：錐形石器背面・腹面
- 49：錐形石器背面・腹面
- 50：錐形石器背面・腹面
- 51：錐形石器背面・腹面
- 52：錐形石器背面・右側面・腹面
- 54：尖頭状石器左側面・背面・右側面・腹面



M0 地点採集の流紋岩製石器類写真（縮尺不同，2020 年 6 月 15 日 撮影 三枝健二）

55：尖頭状削器左側面・背面・右側面・腹面

57：彫刻刀形石器背面・腹面

58：削器背面・腹面

59：削器背面・腹面

61：加工痕のある剥片背面・腹面

68：使用痕のある剥片背面・腹面

69：使用痕のある剥片背面・腹面



M0 地点採集の流紋岩製石器類写真（縮尺不同，2020 年 6 月 15 日 撮影 三枝健二）

70：1 類剥片背面・腹面

75：1 類剥片背面・腹面

78：1 類剥片背面・腹面

79：2 類剥片背面・腹面

87：2 類石核背面・腹面

88：2 類石核 cf 面・b 面

89：2 類石核左側面・背面・右側面・腹面

90：3 類石核背面・腹面



